

俳句雜誌

令和六年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第九号

水 明

2024 9月号



水明全国大会

令和六年六月二九日
(於さいたま共済会館)



主宰と各賞受賞者の皆様

今月の巻頭句

季音雪

長旅の終着駅の白夜の灯

小倉倭子

季音月

羅の反り身を写す大鏡

森川義子

季音花

喜望峰越ゆるを夢見三尺寝

河野はるみ

水明集

籐椅子の父の形に包まれたし

小林京子

鼓笛集

蓮の葉の水面を蔵す牛ヶ淵

皆川更穂

山紫集

乱鶯や倒木山を通せん坊

青木鶴城

水明

令和6年
9月号

今月の巻頭句

京 豆 腐 (作品)

田 舎 暮 し (近詠)

神戸ポートタワー (近詠)

百尺竿頭 〽️主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 〽️季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

全国大会の記

全国大会入選句

季音賞作家の頁 (私の三句)

日高道を・青木鶴城・檜鼻ことは

山本鬼之介

町野広子

森本早苗

五明 昇

檜鼻ことは

小倉 倭子	菊池ひろこ
五明 昇	ほか

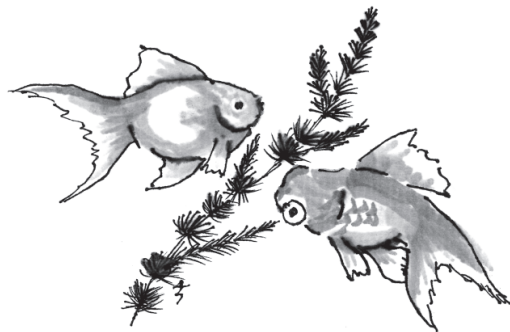
森川 義子	松宮 保人
梅澤 佐江	ほか

河野はるみ	横山 君夫
曲淵 徹雄	ほか

堀之内長一

網野 月を

青木 鶴城



水明集

小林京子 菅原卓郎
新曆文 ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

63

水琴窟（水明集七月号鑑賞）

池田雅夫

67

俳誌望見

染谷風子

69

鼓笛集

菅原卓郎

70

句集喝采

菅原卓郎

73

山紫集

菅原卓郎

74

水明夏行

石井喜恵・染谷風子・皆川更穂

80

水明例会報・各地句会報

83・86

りんどう忌・水明競詠のお知らせ

91

新珠賞作品募集

92

風声・発展基金御札

94

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

京豆腐

山本鬼之介

四阿の梁に精勤する守宮

お天道様めがけて飛ぶよてんと虫

切妻や羅を脱ぐ御寮人さん

冷奴 たつたひと 言「おいしおす」

ブテ イツク や思ひの 丈をハンカチに

噴水が 準備してゐる 次の曲

丸まると 火蛾も 地産か 道の駅

弥次喜多に 徹する 我ら暑気 払

田舎暮らし

町野広子

十薬を挿す文机の黒光り
月餅の美味さに目覚め梅雨一日
梅雨曇鴉がやけに騒がしい
同日の三人からの夏野菜
気の置けぬ女友達暑気払ひ
自家梅酒グラスを満たす琥珀色
近所とて久に会ふ人木僅咲く

今の地に住み二十七年が過ぎた。生地よりも自然に触れる機会が多いように感じる。河鹿の声に癒やされ、翡翠やおしどりも見掛ける。嘗てすぐ側の神社へ来てくれていた青葉梟。徒歩三分程の小川に舞うホタル。地元の人々の仲間に加えて戴き、折々の野菜を戴いたり、お惣菜をお裾分けしたりで、昭和が生きている。あれから多くの家が建ち、若い人達が増えたが、自治会への加入はほほいさない此処でも地域を担う人々の高齢化は進む。

神戸ポータータワー

森 本 早 苗

梅 雨 明 や 甘 き 潮 の 香 光 る 波
み な と ま つ り ミ ス ト シ ャ ワ ー の 弾 け 飛 ぶ
「 鉄 塔 の 美 女 」 の ウ エ ス ト 黒 揚 羽
涼 し げ な 透 明 ピ ア ノ 人 を 待 つ
星 涼 し 棧 橋 離 る 安 宅 丸
夜 景 絢 爛 女 三 人 の 鱧 尽 く し
麒麟 め く コ ン テ ナ ク レ ー ン 月 涼 し

港町神戸のシンボル、神戸ポータータワーは高さ百八メートル、世界初のパイプ構造深紅の鼓型タワーである。別名「鉄塔の美女」と呼ばれている。
タワー頭上のティアラのようなガラス張りの空間からは、神戸の風景が一望できる。
穏やかな海、背後に迫る六甲山、沖には神戸空港が浮かぶ。が何と云っても港の夜景が素晴らしい。潮風に吹かれながら、息を呑む美しさに暫し時を忘れてしまおう。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

六月号

首夏の夜やむかし栄えし伊丹酒

酒と言えば白く濁った「濁り酒」しかなかった時代、美しく澄んだ「清酒」が初めて造られた地が伊丹。麴造り用の麴米と、清酒の仕込み用の掛米両方に惜しみなく精白米を用いることから、その酒は「伊丹諸白」と呼ばれ、遠く離れた江戸でも瞬く間に評判になった。初夏の一夕、酒造りの産業革命とも言われる進化を偲びつつ冷酒を傾ける垂涎の一句だ。

時を得て画聖の庭の白牡丹

日本美術史上「画聖」と称えられるのは雪舟か横山大観を措いてないが、掲句は後者を指すものと思われる。大観は上野池之端不忍池のほとりに明治四十一年から九〇歳で没するまで居住し、数々の名作を生みだした。作者は横山大観旧宅の庭園に立ち、今を盛りの白牡丹を眺めている。画聖の意匠が込められた庭園と花王のコラボに時を忘れる一瞬である。

白鷺を遠見に峡の蔵座敷

蔵座敷は内部が座敷になっている蔵で、多くは一階が客間や隠居部屋に、二階が物入として使われていた。蔵は火に強く、火事から家財を守ってくれる宝箱のようなものであり、また男たちの甲斐性を示す夢の結晶でもあった。棚田に散在する白鷺を遠見に、往年の趣を遺す蔵座敷に地酒を酌めば、谷川のせせらぎが耳に快い。

黒塀や浮世小路をゆく日傘

大阪・道頓堀筋と法善寺横丁をつなぐ細い路地。昼間でも薄暗く、「浮世小路」と書かれた赤い提灯が大正・昭和のロマンを感じさせる。上方落語や吉本芸人など、大阪の芸能にまつわる展示物や一寸法師大明神という小さな神社などがある知る人ぞ知る穴場スポット。都会の真ん中にあるタイムトネルのような路地を行く粋な日傘の行方やいかに。

かわほりを海へ蹴散らす大落暉

かわほり（蝙蝠）はコウモリ目（翼手類）の哺乳類の総称。前肢の指の間にある飛膜が翼に変形して、哺乳類で唯一飛ぶことができる。波濤の浸食によってできた海食洞などに群生し、昼は暗所に潜み日暮れに活動する。夏の真っ赤な太陽が

水平線に沈まんとする刹那、その残光の煌きに断崖を飛ぶ蝙蝠の群れがまるで海に蹴散らされたように乱舞している。

七月号

山雨急まちかねたるは秋田路

「秋田の国では雨が降っても唐傘などいらぬ、手頃な露の葉がさらりとさしかけ、さつさと出て行かえ」。秋田音頭にもうたわれる秋田路は、茎の長さが一・五メートル、茎の直径が五センチ、葉の直径が一・三メートルと長大なことで知られている。成長の早さも驚異的で、山の天気が急変する六月始め頃から緋にモンペ姿の秋田おばこによる路刈りが始まり、漬物や佃煮の逸品が好事家の食卓へ届けられる。

融通の利かぬ男の更衣

更衣（衣替え）の習慣は平安時代の宮中に始まり、明治六年、太陽暦の採用で役人・軍人・警察官の制服を六月～九月を夏服、十月～五月を冬服と定めたことから、学校や企業にも衣替えの習慣が広まった。近頃では地球温暖化に伴う気温変化の違いや個性を自由に表現する文化の発展で衣替えを行わない人も増えているが、一方で頑なに慣習を守る御仁もいて、街にはさまざまなファッションが溢れている。

喫水深し母港へ急ぐ鰹船

鰹漁の発展は人々の間に鰹節が広まった江戸時代に始まる。

時代と共に漁場も沿岸から遠洋へと広がり、近年は漁獲した鰹を船上で冷凍保存する技術の発展が著しい。竿釣（一本釣り）に使う鰹船には生餌のカタクチイワシを入れる生餌槽、鰹を興奮させるための散水機、竿釣りのための釣台が備えられており船型もスマート。今しも喫水深く母港へと急ぐ鰹船の舳先には、父子伝来の大漁旗が翩翩と翻っている。

最高の笑顔の箸を豆ご飯

豆ご飯は、春になると米が少なくなる一方で、えんどう豆が収穫期を迎えるため、米に豆を沢山入れて増量したことが始まりとされている。関西地方を中心によく食べられる「うすいえんどう」はグリーンピースを品種改良してできたもので、春から初夏にかけてが旬。塩だけで味付けして炊き上げた豆ご飯は風味や甘みを感じられ、鮮やかな緑色が白いご飯によく映えて、家族に最高の笑顔を生むこと請け合いだ。

迫る銀輪青大将の眠る径

埼玉県は県民一人あたりの自転車保有台数が全国一位で、川沿いを走る六本の大規模自転車道を有し、自転車が県民にとって手軽な移動手段やレジャーの一つになっている。筆者も毎朝のサイクリングに自転車道を利用するが、道路を蛇行する褐色の影にギクッとさせられた経験がある。「ネズミ捕り」の別名をもつ青大将に特段の恨みはないが、専用道への侵入を防ぐ妙手はないのか。

ゆずり葉

◆季音七月

檜鼻 ことは

風薫る峠の茶屋のにぎりめし

鈴木康世

古来より、旅人が休息や食事をとるために利用してきた峠の茶屋は、今でも形を変えながら、観光やハイキングをする人々の憩の場になっています。

峠の茶屋と言えば、塩津街道沿い福井県と滋賀県の県境の峠に孫兵衛茶屋という茶屋がありました。茶屋経営の西村孫兵衛家は村上源氏の血をひき、この峠を開拓、北陸街道の要所に問屋を営んだ旧家です。松尾芭蕉とのゆかりも深く、芭蕉の弟子の一人素龍が清書した「おくのほそ道素龍本」を秘蔵されています。

孫兵衛茶屋の名物は「とろろそば」でしたが、昨年の十一月、人々に惜しまれながら閉店しました。

さて、風薫る五月、作者が握り飯をたのまれた峠の茶屋は何処の茶屋だったのでしょうか。きっと楽しい旅であったに相違いありません。自然や歴史を感じながらゆったりとした

時間を過ごす峠の茶屋を巡る旅、いつかはしてみたいものです。

新茶淹れ終の一滴まで楽し

星野和葉

日本人の生活に切っても切り離すことのできないお茶、普段はそう気にもすることも無くいただいています。たまにはゆつくりとお茶を楽しむ時間をもつのもいいものです。

新茶とあれば尚のこと。茶葉からは甘い新茶の香りが鼻腔の奥までとどき、茶葉を少し齧ると何とも言えないようないかな甘みが口にひろがります。

急須に茶葉を入れ、湯を注ぎ、暫くおいた後、茶碗へ少しづつ均等に茶を注いでいき、最後の一滴まで注ぎ切ると、美しい薄黄緑をしたお茶が出来上がります。

掲句に詠まれた通り最後の一滴を注ぎきるまで、ゆつたりとした至福の時間となります。茶菓子と共にいただければ、茶の風味も一層引き立ちます。素敵なひと時をお過ごしのこと

です。

薫風や宙をまさぐる象の鼻

荒井 俱子

象は動物園の人気者。大らかな姿で来園者を迎えます。作者もまた、爽やかな五月の動物園をお楽しみだったことでしょう。宙をまさぐる象の鼻の措辞に、ゆつたりとした象の鼻の動きが映像を見るように伝わり、そののんびりとした光景に身を置くことができました。

昨年、天皇陛下がインドネシア訪問時の記者会見で「十五世紀初頭には、スマトラ島のパレンバンから出航したと思われる船が、生きた象などを載せて、現在の小浜市へやって来たことが史料に載っています。日本人が本物の象を見たのは、この時が初めてと言われています」と述べられていました。

もう六百年以上も前の事、インドネシアの帝王から、室町幕府の將軍への贈り物として届けられたようです。そんなことをつらつら思っているうちに、宙をまさぐる象の鼻を見に動物園へ出かけたくなりました。

ミシン踏み明るき窓 辺柿若葉

大塚 茂子

足踏みミシンなのかなあと想像しつつ、随分むかし家にあつた足踏みミシンのことを思い出しました。母が時折使っているのを見ていただけのことなのですが、ペダルを踏むとミシンの針が上下に動くのが面白く、眺めていたものでした。

装飾が施されたキャビネットやアイアンワークの足元部分、木製の台座の全てが美しく、アンティークな家具になりそうです。

定期的にメンテナンスをすれば何十年も使い続けることができるそうなので、きつと、掲句のミシンは今でも現役で活躍しているのだろうと想像するとなんだか楽しくなってきました。瑞々しい緑の柿若葉が見える窓辺でミシンを使われている作者、いい時間をお過ごしのことです。

逃水の揺蕩うてゐる九段坂

曲淵 徹雄

もう二十年以上も前のことになりましたが、九段坂を上り、靖国神社を参拝したことがあります。逃水が見えるような夏の日でした。たおやかな掲句の措辞に、その日の九段坂周辺の情景がオーバーラップするように浮かんできます。

九段坂を上った時、暑さのせいもあってか、なかなかきついなと思つた覚えがありますが、関東大震災の後、九段周辺が復興整備されるまでは、今以上に急勾配の坂だったようです。江戸時代より、観月の名所として知られ、毎年一月と七月の二十六日を、二十六夜待ちと称し、人々が坂の上で月の出を賞したと文献にあります。

九段坂の近くには千鳥ヶ淵もあり、機会があればもう一度あの辺りを歩いてみたいものです。

季
音
雪



詩ふ詠む 小倉倭子

逆説を説き付け骨合ひ二重虹
発端は彼の一言白き薔薇
十七音詩ふや詠むや花茨
片蔭の無想の路をすずる歩き
長旅の終着駅の白夜の灯

風 倒 木 菊池 ひろこ

風倒木くぐりてゆけば日日草
異国人水音と聴く山開き
たれそれに似たる背中や山開き
湯上りの刀自へ揺れそむ七夕竹
緩冷房秘書打ちはごさ Dear Sirs

優駿 五明昇

車寄せに開化の名残夏館
夕映えを肴に加賀の冷し酒
赤提灯へ一番乗りの火取虫
白南風やボトルシップの走り出す
優駿の駈くる大地や雲の峰

尻を浮かせ 境 延昭

青田風尻を浮かせて漕ぐペダル
尾道の直哉の寓居月涼し
荒神輿恋をつかんだ奴がゐる
巴里祭や独逸みやげのコルク抜き
南部風鈴舌がちぎれてそれつきり

夏 椎野美代子

白い靴真すぐ歩くはずなのに
美容室鏡の琉金こそお洒落
サマーコスメ自惚れ鏡かくし持つ
家中の鏡の数や日雷
羅や風をまといつてゐるやうな

上田旅情 島津初花

夏芝居大立て者の名セリフ
城跡の門の奥なる茅の輪かな
名塔を視野に納めり新樹光
片陰へ相輪聳ゆ前山寺
藍のれん潜り蕎麦屋で汗沈む

濁り鮒 鈴木康世

田の面に細波たてて濁り鮒
出合ひあと距離近くなり青蜥蜴
風渡る田水豊かや蚊喰鳥
滴りを洞窟に聴く静かな日
耳朶奥に残る瀬音や河鹿笛

青田 田寺玲子

波あらかき越の千枚青田風
天領の水豊かなり青田波
梅雨深きドックに入れる潜水艦
夏怒涛源平の世のはるかなる
西日背に鮪の親子夕仕度

青田 十倉和子

大青田継ぐと決めたる仁王立ち
青田風は父祖のささやき残さねば
誰も来て憩ふ縁台青田風
篤農の遺せし青田みづみづし
合鴨を放ちて青田さざめかす

終戦忌 鳥羽和風

赤紙の父は還らず終戦日
葛の花昔土葬の石隠す
父母も鬼籍に入るや法師蟬
黙禱にプレー中断終戦日
裏返す風の白さも真葛原

吉 兆 永野史代

風に重さ 星野和葉

戸袋に朝の蜘蛛ある吉兆か
梅雨滂沱ファックスの文字滲みをり
梅雨晴や散髪し合ふ夫と妻
父あらば冷酒こよなく胸に沁む
旧姓「蓮沼」私の蓮の花ひらく

畳縁気にする朝の素足かな
目の前にあるのに見えぬ暑氣中り
こんなにも風に重さが暑氣中り
今日ばかりは無沙汰の彼も土用鰻
小粒なる土用蜆の大き椀

夕立あと 波多野寿子

三 又路 町野広子

溪川の水は翠に夏の空
心地よき風の生まるる夕立あと
青水無月且ては夢をみしことも
待針をはずし風鈴聴いてをり
遠夕焼戦火の国の児等哀し

庭中を青あを揺らし梅雨に入る
梅雨晴や磯鴨の声間近
三又路に三角の家梅雨晴間
安心のための検診梅雨晴間
麦の秋昭和の硝子残る路地

迷路 茂木和子

喧嘩してすぐ仲直り金魚玉
ひまはり畑の迷路の迷路吹き出せり
人の頭に似し向日葵の花重し
父の胡座にすぼつとはまる素足の子
踏みしめて歩く素足の奥座敷

梅雨晴間 森本早苗

かな女句碑まみゆ別所の梅雨晴間
絶滅危惧種青田に二羽の紅き脚
老鷺に明日もと乞へば鳩の声
紫陽花まつりアナベルの丘別天地
青東風や明石へ逸る連絡船

かき氷 山中みどり

曖昧な記憶は消去かき氷
かき氷さくさく別れの所以など
仲見世の裏手杏子のかき氷
かき氷こめかみ押さふる赤い爪
雷と花火が競ふ隅田川

巢鴨刺抜き地蔵界隈 網野月を

献燈に重信の名をみつけたり
吾の影を踏み線香の目に染みる
人ごとに祈るかたちや梅雨晴間
しほれるる朝顔市の名残かな
七夕の風を縮ねる馬簾かな

夏祭り 石井喜恵

殿は俺に任せろ祭足袋
祭半纏洗ひ晒しの三代目
冷し酒男勝りの姉二人
パン食を嫌ふ一徹雲の峰
峰雲や地平線よりトラクター

街暑し 井上燈女

新札に湧く栄一の街暑し
夏葱や栄一伝説今生くる
栄一の貌してやんま低く飛ぶ
青淵の論語の里へ夏燕
記念館出て上蔭の母遠し

風一陣 石山かつ子

鬼気迫る琵琶の語りや夏の夜
調弦の琴のひびきや夏の夜
小桂こうちぎのかさねをおもふ青田風
風一陣炎たつごと青田かな
次の間に命名の和紙夏座敷

梅雨の晴 大橋廸代

大仰な始発警笛梅雨の晴
あかときの車窓万緑目にしむる
梅雨の灯をゆさぶり忠治の決め台詞
大刀拭ひ髭の子分の声涼し
黒揚羽かな女の句碑にたどり着く

いかづち 大村節代

雷ひそか微妙にずれる切取線
いい人のふりして悪事雷走る
はたた神剥製ふいに飛ぶ構へ
遠雷や五百羅漢は空見上ぐ
日雷祈りの石をまた一つ

☆ ☆

追悼・鷹羽狩行

赤松佑紀／井上康明／牛田修嗣
太田かほり／片山由美子
佐藤博美／鶴岡加苗

最近の

名句集を探る

榎山哲彦『光響』
森田純一郎『街道』
野名紅里『トルコブルー』
座談会——司会●筑紫磐井
浅川芳直／大西朋

巻頭三句

伊藤政美／中村姫路
浅井民子／名和未知男
矢須恵由／小沢真弓

今月の華

田口登／本城佐和

俳句と短歌の10作選歌

谷村行海＋早月くら

好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

——古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里



2024年10月号

9月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

女王花

森川義子

女王花咲かせ定年なき家業
 羅の反り身を写す大鏡
 羅をぬける風あり谷中墓地
 在所まで一直線の青田道
 战友の親交厚し孟蘭盆会

炎天下

松宮保人

テレビ音大なるままの大昼寝
 本心を語り始むるサングラス
 緩る緩ると左折のダンブ炎天下
 啜り込む音も馳走や冷索麵
 片かけり皆無の店の陶狸

水匂ふ

梅澤佐江

青田風水匂はせて夕闇来
 双眸清き少女の辞儀や青田道
 宮司の祝詞風に千切るる山開
 山伏主従偲ぶ安宅の閑涼し
 羅や流るるやうに綾まとふ

枇杷熟るる

松井由紀子

マニキュアの紅より翔べりてんと虫
 蹠を押しかへしくる夏の草
 額工房の槌音緑ふかきより
 くちなしの終の一花の白さかな
 搾乳の牛しづかなり枇杷熟るる

夏料理

大場順子

今も耳に残るあの声百日紅
 万緑や縄文杉も躍動し
 ゴール突つ切り走る幼子万緑裡
 ひとつ鳴り後は次々駅風鈴
 一品は貴船の風や夏料理

望郷碑 近藤徹平

海霧深し宗谷岬の望郷碑
水攻めに不屈の神話青田風
青田道強訴の民の顛末碑
太棹に果てぬじよんがら夜半の夏
暑氣払火宅の憂さを払ふ盃

夏祭 高島寛治

この路地に生まれ育ちて夏祭
夏空や航跡白き觀光船
夏の空罅の似合ふ山眺む
水音も一品なりや夏料理
白日に百日紅は沸騰す

稚児の毗 丸山マスマ

百の風鈴迎ふる峡の無人駅
キャンプの火消して星降る峡となり
先達の法螺笏え笏えと御戸開
貴船川数多の夢や恋螢
長刀鉾の稚児の毗祭鉦

山開きの朝 正木萬蝶

声明の朗と大原蓮白し
酒を抜き髭剃る朝山開き
一步先づ神に捧げん山開
梅雨満月狼男が逢ひに来る
合鍵で通ふをとこや梅雨の闇

鰻 山田美佐尾

遮断機を越えて鰻を焼く煙
命日は父の好みし鰻屋で
過ぎし日の彼の名を書く夏の浜
炎昼や少年野球零のまま
生還のつづく野球や炎天下

詩の欠片 荒井俱子

白南風や潮の香匂ふ無人駅
白南風や機嫌よろしき膝小僧
昼寝覚めするりと逃げし詩の欠片
昼寝てふ静けさのあり保育園
よく通る風ももてなし夏料理

秋立ちぬ

池田雅夫

砂時計ちよいと逆さに秋立ちぬ
逐一の報告すませ展墓かな
夕陽にかざす手描きの絵燈籠
唐突に切りだす話稲の殿
最果ての町より遥か流れ星

雪溪ゆく

井上玲子

雪溪ゆくわれ透明となる心地
白南風や沖を帆船すべりゆく
郡上踊大地をたたき祭り下駄
羅を着て艶やかな裾捌き
七夕や楷書で祈ぎ事したためて

苔清水

上戸千津子

滝音に天然ミスト浴びにけり
容赦なく西日は窓にへばりつき
梅雨半ば手彫りの持ち手馴染みけり
我が顔を掬ふかのやう苔清水
ほほ笑みに言葉は要らぬ梅雨晴間

路地風鈴

渡辺舍人

蟬時雨天の一点穿ちだす
ぼつつりと目元すずしき郵便夫
首手拭だらり拭き拭き氷菓売
刈り上げし青葙に身を安らへる
地に平ら極暑を負ひて婆婆よぎる

白南風

内田恵子

カンバスの木枠の香り梅雨の晴
デフォルメのされし自画像梅雨晴間
白南風やゆるき起伏の古墳群
白南風や光となりて少女駈く
工事中の道路モザイク梅雨の晴

濡羽色

野口和子

草深く灯る一輪藪萱草
庭師着るベストの背に扇風機
赤飯炊く祭囃子を口ずさみ
濡羽色の羽がひらりと夏の空
朝採りの夏野菜これ至福かな

山開き 福田千春

風神雷神なだめすかして山開
蓮ひらく音はまぼろし夜勤明け
蓮ひらく母の忌日の朝かな
蓮池や上野は故郷をつなぐ駅
山上に残るは 一戸誘蛾灯

打水 松山清子

水打つて秩父青石つやめける
晩酌は薬味三種と冷奴
白南風や幼馴染と長電話
万緑や硝子のビルの青ざめて
秘密抱く螢袋の開かざる

素足 松本光子

少年の素足の竹踏み嬉嬉とせり
水馬の特技の滑走金メダル
砂地行くをんなの素足紅色に
白南風や赤子まるまる抱きけり
白南風や尼僧の会釈白くせり

ダリア 大塚茂子

大輪のダリア明日咲く鼓動あり
ポンポンダリア音読の声はぎれ良し
天竺牡丹オーケストラは佳境入り
ハンカチに夢二の描く黒き猫
たつぷりと時間ある日の冷し酒

かな文字 熊倉千重子

吊されし句の尾が揺るる星祭
治子さんの声が天より星迎
かな文字の流れ涼しや書道展
枇杷届く食べるに惜しき色と艶
気合入れ外へ一歩を大暑の日

鼻緒擦れ 川崎道子

満目の青田にむかひ深呼吸吸
炎天のお百度石の撫で細る
大空へ競ひて伸ぶる今年竹
桐咲きて海のにほひの近づけり
花火果て痛みだしたる鼻緒擦れ

青田道 西浦 千枝子

玄関に大き穴ある捕虫網
駅よりの青田の道を生家へと
青田道犬に引かれて父母の墓
隧道抜け眼にやさし青田道
高原に婆さま一人雨を乞ふ

花 鋏 檜鼻 ことは

睡蓮や共に微睡む昼下がりに
輪郭の太き青空花梯悟
炎天や杖を休むる九段坂
八月やテールブルに置く花鋏
行く秋や草の庵に立つ煙

ああ玉杯に 青木 鶴城

薄衣の仕立ての仕付玉結び
玉杯に受くる銘酒や夏座敷
戦没の墓碑にかうべを梅雨明くる
迫り来る時の鬩りや夏惜しむ
水団に思ふ贅沢夏の果

夏空の下で 日高道を

結界の先は神域五月間
枇杷熟るる旧街道の分かれ道
被災地の子らにも同じ夏の空
梅雨晴間書入れ時の立飲み屋
逆転の無罪判決夏の雲

青 芒 飛永 鼓

しなやかに波打つ土手や青芒
田園の主の顔して青芒
青芒そ知らぬ顔のふりをして
ゆるやかな息をしてをり青芒
終生を風に委ねて青芒

守 宮 原田 秀子

油頭まねのハンカチそそと忍ばせて
お気に入りのハンカチ色の褪せるまで
クライマー凌ぐ守宮の名演技
存分に腹芸みせて守宮消ゆ
子の刻につひに目見ゆる守宮かな

季音花

海山開き夢さらら

河野 はるみ

山開き新調リユツク床の間に
 雪溪の始めの雫せせらぎに
 喜望峰越ゆるを夢見三尺寝
 薄衣や母の形見の紋違ひ
 羅や母の好みの香扱ふ

暑氣扱ひ

横山 君夫

水琴窟の音色濡れをり走り梅雨
 ころ合ひの羹あつものうれし夏料理
 咲き続くことも力や百日紅
 片陰に入り甦る歩幅かな
 今もつて曾祖が上座暑氣扱ひ

一踊り

曲淵 徹雄

猫を抱く女を摩る五月闇
 悠然とゆるる大楠月涼し
 玉垣を越す蚊柱の一踊り
 弁天の乳首に注す朱日雷
 万緑の吐いて吸ひたる鳥の数

夏怒濤

野田 静香

乱れ飛ぶ雲の行方や夏怒濤
 土用入日本列島燃え盛る
 産声の待てど聞こえず夏の星
 軒下を詰めてもらひぬ大夕立
 谷風に躍る斑紋山女釣り

茅の輪くぐり

石川 理恵

髪切つて茅の輪くぐりのからやかに
 心太食べつつ漢字教へをり
 八重咲の百合ふんだんに供へけり
 大南風紙ひかうきは谷底へ
 蓮を見るなら不忍池でせう

九十九折

保坂翔太

風薫る麒麟の顔がぬつと来る
冷酒酌む謙信ばりの馬上盃
青田風旧家へ続く九十九折
草原の中に一枚青田かな
夏草や兵が近づくと不発弾

冷奴

染谷風子

黎明や登山電車の発車ベル
祝酒に酔うて一睡明易し
梅雨明けや八木節囃す当り鉦
水枕しても地獄ぞ熱帯夜
申し分なき妻をとなりに冷奴

岬馬

笹本啓子

白南風にすつくと立ちし岬馬
白南風や戦艦三笠走るかに
水打ちて塩こんもりと若女将
せせらぎの音も一品夏料理
スタンドに太鼓轟き雲の峰

神職の白

石田慶子

頂き白し神職若き山開
新品のリユックばんばん山開
茄子もぐやささくれの指すつと引く
気が付けば厨の戸棚蟻の列
土用風匂会帰りのエコバッグ

夏の昼

渋谷きいち

片蔭や並ぶランチはキッチンカー
炎昼や川に沈むる缶ビール
炎昼や泣く子唾ふる乳首かな
病む父へみやげ一折土用鰻
束の間の風は福音雲の峰

夏祭

下川光子

どやどやと湯屋の暖簾を祭足袋
着流しの父なつかしき宵祭
たむろして祭囃子の十五歳
白南風や漁師の顔に深き皺
竜馬見し海を眺めつアイスクリーム

虫の声 田中章嘉

蟋蟀や庭に放置の鉢や石
湯上がりの風に身を置く虫の声
虫の声眠れぬ今宵旅の宿
虫の音や夜更の厨あたりかな
鉦叩き般若心経唱へし

夕立 野平美紗子

蜘蛛の巣の蜘蛛の逃げゆく夕立かな
浜名湖や西の空より夕立雲
夏休み新たな漢字子に教へ
荒磯に燈台霞む夏の海
鳶二羽大きな円描く夏の海

夏木立 宮崎チアキ

書物より離す眼に夏木立
印要らぬ宅急便や梅雨明くる
国境を越ゆる爆撃雲の峰
とめどなき雨音耳に夏の宵
真夏夜の所詮かなはぬ恋心

暑氣払ひ 瀬戸雄二郎

暑氣払ひなどと平和の国民よ
払はれて暑氣の集まる台所
デパートの屋上今日も暑氣払ひ
暑氣払ひの謀議はすぐに纏まりぬ
今日も又暑氣払ひちゆう父の酒

昭和歌謡 野村美子

よみがへる昭和歌謡よ夜半の夏
夏の夜や婿の郷里の郡上踊
十葉や宅地開発進む村
青田風作業のあとの握り飯
武甲山見渡す里の青田波

夏の空 葛城千世子

夏の空起重機まさに鶴の首
黙々と荷物両手に青田道
青田風位牌忘れてUターン
本堂の窓全開や扇風機
粘土遊びの子をかたはらに蒲生くる

蓮の花

鈴木玲子

「めめ」といふ絵馬の並びて梅雨晴間
円陣の声突き抜けて夏の朝
蓮の傘ころころころと下校路
神神し背伸びして見る古代蓮
戸隠の忍者の里へ夏の霧

若大将

松島寛久

青春の映画は夏の若大将
黒人のサングラスよりジャズの音
悪面もサングラス取れば恵比須顔
昭和が好きラジオのひばり蚊帳の中
炎天の地蔵に笠貸す老農夫

青田

高橋満耶子

天地の恵み吸ひ上ぐる青田かな
思考力どんどん下る酷暑の夜
熱帯夜いつも変らぬ大軒
新札の渋沢うごく半夏生
五十年ぶりの同窓会や竜舌蘭

立葵

梅澤輝翠

飛行機を掴みさうなる雲の峰
久保田城石垣もなき立葵
海洋学生処女航海の夏の海
夕立や子どもペンギンすべり落ち
夕立や赤いペディキュア塗り終り

ダリア咲く

越田栄子

山麓の風にダリアの咲き揃ふ
ウエディングドレスのブーケ白ダリア
簪にしたきポンポンダリアかな
カウンターに深紅のダリア純喫茶
早世の姉への未練ダリア咲く

夏を謳歌

西幅公子

胸がすく太平洋の夏怒濤
柱組む大工の半裸夏の浜
大仏の耳朶ゆたか夏の空
雲の峰湧く稜線に辿り着く
雲の峰牧に飲み干す乳の濃さ

浴衣 寺内洋子

艶めける古女房の藍浴衣
娘四人揃ひ浴衣の晴着めく
初浴衣あさがほ柄の定番を
青田中合鴨真面目仕事人
病葉や語る芸術論青し

天道虫 山戸美子

一円のコスト三円かき氷
衛星に翅の応用天道虫
大西日円空仏の表情筋
天めざす翅の神秘さ天道虫
孫と来る姉の大きな夏休み

醬の香 森和子

白南風の島にほんのり醬の香
白南風や期限の迫るパスポート
白南風や海に開ける滑走路
打水の門に受け取る回覧板
水打つて風情の庭となりけり

暑中見舞 綿貫ひさの

草に負け庭の草取り御手上げに
無くしもの思ひさまま半夏雨
夏夕べ浸る湯船はミントの香
大汗や折紙習ふ公民館
ペン持つも暑中見舞はスマホかな

☆ ☆

『水明誌』を繙く（水明七月号）

堀之内長一（埼玉県現代俳副会長・
『海源』編集長）

はんざぎや我にもありぬ深眠り 永野史代

はんざぎという言葉に出会うたびに、どこか懐かしい思いが湧いてくる。はんざぎは不思議な、いや奇妙な生きものである。近くの川や沼にいつもいるわけではないので、記憶があるとしたら、水生動物園などで見たか、メディアの中の映像であろう。はんざぎという名の由来もにわかには首肯できない。口が大きく裂けているから、というほうが愛敬があつていい。オオサンショウウオを今ははんざぎと呼んで珍重しているのは俳句だけのような気もするのだが、例の有名な小説の影響もあつてか、じっと身を潜めて動かず、この宇宙の存在意義について思索しているような表情にも見えてくる。

掲句は、そんな生きものの日常を、まるで深眠りしているようだと思へた。私にもそんな一日があつたなあ、そんな親愛の情をもつてはんざぎに語りかけている。死んでいるわけではない。揺り動かせばまぶたがぴくっと動き始める。

実は、もうひとつのはんざぎの句に出会った。

はんざぎの太れば椎の太る村 福田千春

はんざぎと共に棲む村のすこやかな光景である。

かたつむり歩いた距離が生きた距離 瀬戸雄二郎

このごろ、梅雨の時期になつても、かたつむりを見かけなくなつた。かたつむりだけではない。蛙やトンボやカマキリもほとんど出て来ない。温暖化のせいなのか、何か人間だけが知らない事態が密かに進行しているようで無気味である。

それはさておき、かたつむりと言えば、ゆつくりのんびり、そして動いた跡に残るひとすじの銀色の道である。感情移入をさせやすい生きものだけに、自ずと内省を誘う。それがかたつむりだ。でで虫、でんでん虫、まいまいなど、愛称もさまざま。瀬戸さんの「でんでん虫」と題する五句は、すべてかたつむりに捧げる讃歌である。その中でも、掲句はもっとも境涯感を滲ませる一句である。来し方を振り返つて、そのままの思いをかたつむりに託して表白した。類想があると言われそうだが、そんなことはまったく気にならない。

一句目（かたつむり戦ひもせず逃げもせず、五句目（でんでん虫ひねもす見たる暇人よ）、いずれも自分を見る目にゆとりがあり、俳味とペースの漂う味わいに惹かれる。かたつむりも私も生きもの、そんな俳句の生れるところへ。

現代俳句鑑賞

網野月を

掌に載るだけ載せて露の臺

宇多喜代子

〔俳句〕7月号・好日より

「露の臺」狩りに来たのではないのであろう。偶然にも「露の臺」を見つけて摘み出したのである。摘んだのは良いものの、どうやって持って帰ろうかと思案に余っている風でもある。「露の臺」を見つけた嬉しさが滲み出ている。他に「朝日差す白梅は白際立たせ」「籠の中みかんも影もみかん色」がある。

柿若葉吹きてぬくみし笛を手に

中西夕紀

〔俳句〕7月号・蛇の領より

楽器を奏する時に楽器自体をウォームアップすることがあるのだが、それに類することなのであろう。ただ、作者の感覚は故意に温めたのではなく、何時の間にか温まった笛を手にして、改めて笛の温みを感じたということなのである。ちよつとした気付きの句であり、「柿若葉」の季節だからこそ気付きなのである。他に「紐一本張ればたちまち蛇の領」「茅茸の一字うつくし柏餅」がある。

向日葵の顔に面影ありにけり

坊城俊樹

〔俳句〕7月号・将門より

「向日葵の」の「の」が半切れの用法ならば、誰かの顔に面影を見出したということである。「向日葵の顔」と繋がるならば、向日葵を見ていると誰かの面影を思い出すということになるだろう。向日葵に起因する面影なのか、向日葵のような顔つきなのか、何方にしても悪くない思い出の中の面差しであるようだ。他に「将門の首塚も泣く亀鳴けば」「将門を刎ね佐保姫を誘へり」がある。

明日ありと信ずれば混む冷蔵庫

関根誠子

〔俳句〕7月号・街角ピアノより

「冷蔵庫」に何だかんだと詰め込んでいる、と解釈した。それにしても上五中七の措辞「明日ありと信ずれば」の何と大仰なことであろうか。逆説的に明日はもうない、と感じることの方が大変な筈であるのに。他に「リラ冷えや街角ピアノに忘れ傘」がある。

背に翼なき少年の跣足かな

林桂

〔俳句四季〕7月号・風の七月紀行へより

身体の部位を素材とした句作りは、具体性があって読者の心に妙に切れ込んでくるようだ。「翼なき」「跣足」は現実であって、ファンタスティックな事柄を排除しつつ、それでも夢を煽る様なこの表現は、若さへの憧れなのであるうか。

初夏やグランドピアノ翼立て 藤田直子

〔俳句四季〕7月号・香水より

アップライトピアノに対してグランドピアノはハーブを横置きしたような形態をしている。嘗てはその景から「フリーゲル(翼)ピアノ」と呼称された時代もあったほどである。句の意味するところは、グランドピアノの蓋を開けて、反響板を立ててその体を大きく見せているところを表現したものであるう。他に「晩節や香水の減りただならぬ」がある。

合歓咲いて黄泉の入口照らしおり 松本勇二

〔俳句四季〕7月号・わたしの歳時記より

相原左義長師、金子兜太師の句を引用しつつエッセイを添えていて、巧みに季語「合歓の花」を導き出している。掲句は作者が「合歓の花」に霊的なものを感じ取っている証である。

淋しさに古きものなし夏の星 塩野谷仁

〔俳壇〕7月号・麦は穂により

上五中七の句意が見事というしかない。所謂、こと俳句なのであり、そのことが射た時の読者の心に沁みとおる重厚さが感じられる。座五の季語「夏の星」が柔らかみを添え

ている。他に「麦は穂に我にいつもの掠り傷」がある。

河骨へ沈む陶片のみならず ふけとしこ

〔俳壇〕7月号・蜂の巣より

「河骨」が咲く水中をのぞき込むと其処には陶片だけではなくて、何やら別のものを見出した、ということではないだろうか。元の鉢が陶片に見えれば、もしかしたらゴツゴツとした根莖が他にも見えるということもなるであろう。他に「蜂の巣の小部屋が五つまで出来て」がある。

前山を大きくしたる若葉かな 雨宮きぬよ

〔句誌「樞」〕7月号・五月より

春先は新芽で「山笑う」の季語が成立している。稜線が一回り大きくなったように見えるものである。若葉は更に山を大きく見せている、というのである。空間的に「大きくし」ているだけでなく、その存在感も重厚になったという意であろう。他に「仏塔の影よりも濃く蜥蜴出ず」「河鹿笛夕べは夜へ沈みゆき」がある。

塗り替へし小橋を渡る子鹿かな 橋本榮治

〔句誌「樞」〕7月号・北道より

添えられたエッセイを読むと奈良のことのようであるが、題にあるように北国のことであるようだ。「小橋」はもともと人のためのものであるうが、「子鹿」がこの橋を渡っているところに面白味があるのである。「子鹿」の白斑と塗替えの橋の色の鮮やかさのコントラストが目に見えようである。

全国大会の記



青木鶴城

雨の予報で懸念された天気も矢張り「水明晴れ」となった六月二十九日、さいたま共済会館大ホールにて令和六年度水明全国大会が開催されました。今年は九十二名の参加者申込み中二名の欠席で九十名の参加となりました。

【開 会】

定刻の十二時十五分、網野月を常任運営幹事長の開会の挨拶の後、この一年間にお亡くなりになった、岡野順子様（板橋区）、霜中冬至様（若狭町）、柚木治子様（さいたま市）のご冥福を祈り黙祷を捧げました。特に柚木治子様は大会直前のご逝去で、皆様から驚きの声が上がりました。

【主宰挨拶】

続いて主宰の挨拶。来年は水明創刊九十五周年を迎える年で周年記念行事としての全国大会・懇親会を開催すること、七月一日付で網野月を副主宰兼常任運営幹事長、青木鶴城事業部長の新人事とすること、印刷費等諸物価の高騰への対応及び毎月の発行日ができる限り早めるために、今年より水明誌の十一月号と十二月号を合併号とすることが報告されました。

【会計報告】

続いて日高道を総務部長より令和五年度の会計報告がなされ、誌代収入及び同人・季音同人費収入では運営固定費用を賄えないのが現状であり、皆様の篤志による発展基金の補填によって運営出来ている旨が報告されました。

【句集紹介・花束贈呈】

令和五年度に上梓された句集「帰心」と「朗朗」との二冊が紹介されそれぞれの作者、小倉倭子さん、茂木和子さんへ花束が贈呈されました。上梓おめでとうございます。

【水明六賞の表彰】

水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞の受賞者に対して主宰より賞状と賞金及び受賞者の名前を詠み込んだ句の色紙、鼓笛賞及び山紫賞の受賞者にはそれぞれ大村節代氏、網野月を氏より賞状、賞金並びに短冊が授与されました。各賞の受賞者及び受賞者への主宰句は下記の通り。

【水明賞】

梅澤輝翠 翠巒すいらんや白堊の館輝けり
越田栄子 栄光を享けてすすく燕の子

【季音賞】

日高道を 例幣使街道をゆく揚羽蝶
青木鶴城 名にし負う白鶴城はっかくじょうや月涼し
檜鼻ことは ことのはの雅なるかな緞の婦人

【かな女賞】

田寺玲子 玲瓏れいろうと響く声こゝね音よ夏帽子
由良ゆら女 籐椅子をゆらす少女よ風青し

【新珠賞】

菅原真理 真ん中に巨おおき舟盛り夏料理
佐々木史女 女王花かや歴史小説読みをれば

【鼓笛賞】

岡田宣子

【山紫賞】

越田栄子

受賞者への各々の所属句会より花束贈呈があり、それぞれ喜びの挨拶の後、写真撮影となりました。

【委嘱状の授与】

新同人、季音昇欄同人へ主宰より委嘱状の授与がありました。対象者は下記の通り。

【新同人】

新井のりこ 石関六弦 糸井しるく

大島千恵 倉田星歩 香田裕誌

寺町知子 皆川更穂 森下山菜

【季音「月」欄→「雪」欄】

町野広子 井上燈女

【季音「花」欄→「月」欄】

飛永 鼓 原田秀子 日高道を

青木鶴城 檜鼻ことは

【新季音「花」欄】

山戸美子 綿貫ひさの 寺内洋子

西幅公子 森 和子 梅澤輝翠

越田栄子

【兼題句表彰】

事前投句の兼題句（「花曇」、「若鮎」、「天」の詠み込み）

より主宰選の三極と特選及び秀逸句の表彰があり、主宰より

三極及び特選には色紙、秀逸の作品に短冊が授与されました。

尚三極の発表は最後まで伏せてあり、特選及び秀逸の発表が

終わった後、句が揮毫された掛け軸（青木鶴城書）を垂らしながらおもむろに発表される演出がありました。

三極の句と作者は下記の通りで、特選、秀逸その他の参加投句は別紙に掲載されています（投句者一二九名、総投句数一五一六句）。受賞の皆様大変おめでとうございました。

【三 極】

「天」若鮎に 曲り 幾度 千曲川 五明 昇

「地」ドローン 旋回 吉野連 山花曇り 森本早苗

「人」春の 田をうなふ 農機の 作用点 菅原卓郎

【高得点者表彰】

兼題句の高得点者の表彰があり、記念品が授与されました。高得点者は下記の通りで、五明昇氏の圧勝でした。（五点上の表彰対象者五六名）

第一位 五明 昇（四六點）

第二位 境 延昭（二三點）

第三位 日高道を（二十點）

【八組以上投句表彰】

兼題句の八組以上の投句者（四四名）への表彰があり、記

念品が授与されました。毎年、水明創刊以来の経年の数の投句（今年は九十四句）をされる五明昇氏には頭が下がります。

第一位 五明 昇（四七組）

第二位 境 延昭（三六組）

第三位 加藤でん治（十八組）

【主宰の講評】

三極を始め、特選句及び秀逸句について主宰の講評を頂きました。時間の関係で全句の講評とは行きませんが、主宰の講評に皆さん熱心に耳を傾けていました。

【閉会】

大村節代編集長より閉会の言葉を頂き、主宰の拍子木に合わせて恒例の関東三本締めで、全国大会はお開きとなりました。

司会を務めて頂いた日高道を総務部長、事業部の小林京子さん大変お疲れ様でした。

【懇親会】

会場設営の後、五十名が懇親会のテーブルに着席。懇親会

の幕開きとなり、主宰の挨拶の後、保坂翔太事務局長の発声で乾杯、歓談となりました。今年のアトラクションは「国定忠治」の赤城天神山不動の森の芝居と「クリアウオーターバイバルバンド」の演奏との二本立て。

国定忠治役は元新国劇俳優の桐山遊童氏、高山の定八役は網野月を幹事長、清水の巖鉄役は日高道を総務部長が務め見事な呼吸で観衆を沸かせました。

バンド演奏は、「アイラブユー」「君は薔薇より美しい」「横浜ホンキートンクブルース」「エブリシングハップントゥミー」「東京ブギウギ」「銀座の恋の物語」「居酒屋」「北酒場」と盛りだくさんの演奏と歌で盛り上がりました。今年はダンスフロアーに出て踊る人が昨年に比べて少なかったのはさみしい感がありました。来年は九十五周年の記念行事、ダンスフロアーを埋め尽くして欲しいものです。

お楽しみの中に終了の時間となり、大村節代編集長の閉会挨拶の後、関東三本締め、北山建治郎氏の応援エールで幕を閉じました。

関係スタッフの皆様大変お疲れ様でした。

水明全国大会 会場風景



水明全国大会 入選句

兼題

「花曇」

「若鮎」

「点」

(詠み込み)



山本鬼之介選

【天】

若鮎に曲り幾度千曲川

五明 昇

【地】

ドローン旋回吉野連山花曇り

森本早苗

【人】

春の田をうなふ農機的作用点

菅原卓郎

【特選】

花曇り微速で上る達磨船

五明 昇

花ぐもり弥勒菩薩の思惟の先

森川義子

花曇通船堀の水の高

大塚茂子

花曇呼べばすぐ来る渡し舟

丸山マスマ

花曇手機の箴のひとしきり

大場順子

花曇腰たをやかに伎芸天

井上燈女

水音の導くままにのぼり鮎

井上燈女

養花天静かに寄する波動し

花ぐもり床屋の椅子にをんな客

無造さに並ぶ骨董花曇

花曇り勝閑橋は閉ぢしまま

春疾風一点にらむ鬼瓦

念入りにみがく手鏡花ぐもり

春風や的の黒点矢を誘ふ

読点二つ句点は一つ春行けり

碧空を奔る点描花吹雪

勝ち点を上ぐるスパイク春の芝

長首を打ち合ふキリン花曇り

調律師の指の湿りや養花天

動物園を丸ごと包む花曇り

養花天板に還りし額の絵馬

花ぐもり阿弥陀に被るベレー帽

太陽に光をもらふ小鮎かな

花曇コントロールトの愛の唄

若鮎のひかりの束となり廻る

百千鳥野点の空の広ごりに

無位無冠鮎の子長い旅に出る

点滴は漏刻に似て春の昼

うららかや野点に並ぶ膝がしら

花ぐもりいつしか空と溶け合へり

空洞の幹かくしやくと花曇

田寺玲子

境 延昭

檜鼻ことは

高島寛治

石井喜恵

原田秀子

反町 修

網野月を

曲淵徹雄

青木鶴城

保坂翔太

日高道を

菅原真理

大橋廸代

大村節代

越田栄子

霜多光代

石山かつ子

池田雅夫

篠崎紀子

十倉和子

下川光子

永野史代

横山君夫

【秀逸】

鮎の子の鱗美しき茜色
 鳥離る十五の春の花曇り
 古書市に「名所百景」花曇り
 白無垢の花嫁杜に養花天
 身をしなふ若鮎蒼きバレリーナ
 気怠げなフェリーの汽笛花ぐもり
 愛用の地図の折り皺花曇
 思ふほど鳴らぬ鰐口花曇
 托鉢の鈴遠ざかる花ぐもり
 若鮎や海より山へ小さき使者
 点滅の機影が過る朧月
 さ緑の早瀬さ走る小鮎かな
 弧を描き光を散らす小鮎かな
 花曇り旗艦三笠の勇姿なほ

野口和子
 梅澤輝翠
 染谷風子
 星野和葉
 柚木治子
 境延昭
 阿部幸代
 梅澤佐江
 石川理恵
 近藤徹平
 岡田宣子
 加藤でん治
 野田静香
 正木萬蝶

五明 昇
 飯田忠男
 菅原卓郎

弱点を見透かすやうな春の月
 瓦礫より沈金の椀花ぐもり
 若鮎ら未知の緑へ溯る
 若鮎の堰を越すとき水匂ふ
 点点と漁火の沖春の星
 点滴の痕の青痣リラの雨
 親亀の背中に子亀花ぐもり
 花曇黙して歩く夫婦かな
 春うらら一点物を纏ひをり
 菩提寺の急な坂道花曇り
 真珠一粒胸にゆらして養花天
 後二点足りぬシルよ春うれひ
 花曇ひとり旅立つ滑走路
 花曇キリンの覗く獲の檻
 野点かな不思議なほどに緋毛氈
 こけし押し合ふ硝子のケース花曇
 端嚴な男点前や松の芯
 春の闇かの清張の「点と線」
 急流こそが吾が意ぞ小鮎かな
 城子碑は何も語らず花ぐもり
 いにしへの奈良の町行く花曇り
 退職のあの日も今日の花曇
 花の冷え句読点無きラブレター
 点と線繋がる事件春の宵

清水桂子
 池田珪子
 菊池ひろこ
 大場順子
 鳥羽和風
 境延昭
 佐々木史女
 森本早苗
 日吉亜弥子
 井上燈女
 石田慶子
 石井喜恵
 網野月を
 町野広子
 皆川更穂
 曲淵徹雄
 青木鶴城
 島津初花
 森下美智枝
 日高道を

俳人の視点は厳し今日の李花
 点になるまで見送つてゐる帰雁かな
 交差点わがもの顔の春疾風
 二度寝する一人の目覚め花曇
 若鮎の眩しすぎたる命かな
 八陣の庭しづかなり花曇り
 花曇り昭和の木馬廻り出す
 点滴の音なきリズム目借時
 首と首からめる麒麟養花天
 庭下駄の鼻緒湿りて花曇
 咲ききつて風の重たき花曇
 碑に江戸まで八里花曇
 置き石となり切る亀や花曇
 吉野山日本一の花ぐもり
 花曇ラップの切れめ見つからぬ
 若鮎の群れ一心に真直ぐに
 綿菓子为空へ吹き飛び花曇
 警策の音が奥より花曇
 お点前の所作うつくしき春障子
 小鮎ゆく川を光の帯なして
 仁王の「吽」今日はやさしげ花曇
 奔る小鮎駆ける小学一年生
 竹の子や一点決めて鍬下ろす
 「奥の細道」をゆかば黒羽小鮎かな

日高道を
 網野月を
 菅原真理
 小林京子
 〃
 大橋廸代
 本橋稀香
 新 曆文
 越田栄子
 笹本啓子
 石山かつ子
 石関六弦
 丸山マスマ
 西幅公子
 荒井俱子
 丸屋詠子
 綿引まりこ
 熊倉千重子
 永野史代
 横山君夫
 松井由紀子
 〃
 飛永 鼓
 渋谷きいち

グランドの砂の箒目花曇
 リラ冷えや豊頬点す牡丹刷毛
 点点とやがて線成る田植かな
 養花天苦屋に出会ふ散歩道
 奥つ城に地酒そそぎぬ花曇
 麗人の帽子はななめ花ぐもり
 若鮎の逆立ちのまま焼かれをり
 珈琲の苦味濃き日や養花天
 足場組むパイプの音や花曇
 般若心経無の字のいくつ養花天
 見当たたらぬ指輪のゆくへ花ぐもり
 まどろみの高層ビルや花ぐもり
 花曇人影絶えし特攻碑
 点眼の目の端に見る春の蠅
 石垣や百万石の養花天
 登り窯火守り三日の花曇
 遠ざかる君点となる春夕焼け
 たつぷりと美白のパック花ぐもり
 野暮と粹間に生きて養花天
 撮り鉄のならぶ堤や養花天
 九頭竜の川は揺りかこ小鮎かな
 花ぐもり屋台綿菓子さくら色
 お点前の耳に囁り野点かな
 校長の窓に顔出し花ぐもり

野口和子
 椎野美代子
 飛永 鼓
 寺町知子
 星野和葉
 境 延昭
 河野はるみ
 岡田宣子
 梅澤佐江
 〃
 石川理恵
 山岸久美子
 近藤徹平
 福田千春
 羽島秀子
 北山建治郎
 茂木和子
 内田恵子
 山中みどり
 加藤でん治
 松村笑風
 野村美子
 宮崎チアキ
 松本光子

佳作

蓑笠を吊す落柿舎花曇
未だ見る百点の夢春愁
若鮎の上る尾鱸にある力
朗咏の銜返らず花ぐもり

井上玲子
正木萬蝶
松宮保人

演劇部員を呼びかけ募る養花天

葛城千世子

花ぐもり記憶の中の羊羹屋

阿部幸代

風に乗り一点となる風の位置

井上燈女

花曇り世の片隅に常夜灯

井上燈女

めぐり会ふ人それぞれの花曇

井上燈女

船影を浮き彫りにする養花天

井上玲子

舫ひ舟ゆるる河岸花曇

井上玲子

掌にのせ若鮎のみづみづし

宇都宮隆文

一点を見つめる先や鳥帰る

永野史代

母の衣ひんやりとして花ぐもり

永野史代

黒門をゆつくり過ぐる花ぐもり

永野史代

鮎の子は湖のまがたまかと思ふ

永野史代

指でなぞりし点字の文字や春うれひ

永野史代

星座の点をたどれば牽牛・織女かな

永野史代

甘辛の聖天寿司よ花曇

越田栄子

養花天少女剣士の胴一本

越田栄子

若鮎を待ちたる川に親心

越田栄子

横向きの河馬のウインク花曇

越田栄子

若鮎を待ち構へたる堰の鳥

越田栄子

春風や歩幅大きく交差点

越田栄子

旧道に続く迂回路花ぐもり

遠藤人美

点線の消えゆく空や雁帰る

横山君夫

小刀となりし若鮎堰越ゆる

横山礼子

「点と線」気取りて春の時刻表

岡田宣子

花曇刹那に怯む雲龍図

岡田宣子

花曇防災へりの影西へ

岡田宣子

放流の小鮎や試練乗り越えよ

岡田宣子

花散るや野点の席の緋毛氈

岡田宣子

窓越しに猫のまどろむ花ぐもり

下川光子

二八蕎麦すすする街道花ぐもり

下川光子

花ぐもりかくれんぼする母と子と

加藤でん治

点滴の最後の雫臙なり

加藤でん治

里山に紅一点の椿かな

加藤でん治

花曇り水面に浮かぶ思ひ人

加藤でん治

鮎の子と人間の子等鬼ごっこ

河野はるみ

名匠の蠟燭点す入彼岸

河野はるみ

花曇握りの馴染む考の杖

皆川更穂

若鮎や故郷の星へ駆け上る

皆川更穂

蒼天を開く一点揚雲雀

皆川更穂

再会的笑顔は遺影養花天

皆川更穂

溪流の瀬音に溶くる小鮎かな

皆川更穂

北窓を磨き上ぐるや花曇

皆川更穂

点滴の拍子もたつく目借時

皆川更穂

養花天小言の後は抱き締めて
 掌に小鮎と水のふつくらと
 窓越しに眺むる海の花曇
 輪唱の洩れ来る館養花天
 大らかに裾引く富士や花曇
 功臣の小さき古墳養花天
 若鮎を育む瀬音朝まだき
 激つ瀬をうねり上るや小鮎の尾
 五街道の起点の橋を朧月
 若鮎や汽笛尾を引く秩父の瀬
 日捲りを忘れて三日花曇
 若鮎の勢そのままに手中かな
 若鮎に歓声上ぐる里人よ
 花粉症点眼水が鼻に抜く
 花ぐもり乙女の像が跳ねてゐる
 道化師の帽子に小銭花ぐもり
 整列と点呼のならひつくしんぼ
 降りさうで降らぬ夕暮花曇り
 糠床は妻の領域花ぐもり
 町医者者のロビーの木椅子花ぐもり
 胸に抱く猫の毛ざはり花ぐもり
 輪切りの脳を診らるる真昼花曇り
 花曇見えねど強き紫外線
 花曇りゆかしきものは鼻濁音

皆川 更穂
 関根 千恵
 丸屋 詠子
 丸山 マスミ
 宮崎 チアキ
 境 延昭

花曇り四辻に標す「浦和宿」
 低空を突つ切る一羽花ぐもり
 若鮎に用水堰の勢かな
 偕老の揃うて囃す小鮎かな
 火を点ける刻み煙草や春愁ひ
 花曇石に戻りし芭蕉句碑
 若鮎や二十身長跳ぶ不思議
 京劇の後は点心春日和
 若鮎や食み跡残す川の石
 終点の終バスの棚鉢の梅
 寄席は春紅一点の軍談師
 若鮎や岸辺に一夜城址の碑
 無住寺の因縁話花曇
 水攻めの陣所は古墳花曇
 S Lの汽笛くぐもる花曇
 白椿男点前の凜々しさよ
 ポーイスカウトの点呼桜の散る中で
 長き吊橋行こか戻るか花曇り
 花曇り久に紅さす牡丹刷毛
 片減りの紅緒の足駄花曇
 花曇り大和に高き塔の影
 花曇り鳴かずには帰る救急車
 花曇り木曾路に探す阿六櫛
 花曇り路地に漂ふもんじやの花曇

曲淵 徹雄
 近藤 徹平
 熊倉 千重子
 原田 秀子
 五明 昇

壁紙の汚点となりぬ春蚊かな
 養花天けむりまつすぐ父の茶毘
 口あけて若鮎必死堰をとぶ
 若鮎の魚道水瓜の香りして
 百年の樹のこゑ聴かむ花曇り
 背骨頭つ老犬に蹤き花ぐもり
 同乗の救急車ゆく花曇り
 点滅の光に音に朧雲
 竹林は風棲むところ養花天
 ふつと笑む熟寝の赤子花曇
 鯨尺に母のぬくみや花曇
 反転の形に焼かれし小鮎かな
 点心のあかしろみどり花曇
 花曇ふと口遊ぶ「片思ひ」
 花曇り手提げ袋に江戸古地図
 花曇り眼鏡スマホを置き忘れ
 花曇り野麦峠に石を積む
 起点から終点目ざす春の旅
 花ぐもり黒衣は無とす能舞台
 宿帳に妻と太文字花ぐもり
 嬰の齒のあたま見えくる養花天
 磴を踏み飯盛山は花曇
 花ぐもり激流を切る漣の棹
 花ぐもり秩父に多き峠道

太田 貴
大橋 勉代

大熊 道郎

大場 順子

大村 節代

大塚 茂子

若鮎の跳ぬる七色綾となす
 恋文はポスト大好き養花天
 公園の朽ちかけの椅子花曇
 若鮎の光となりて堰を越ゆ
 千頭の牛点点と牧開
 国籍のなき若鮎の帰心かな
 読みづらき地名人名花ぐもり
 行く春や点で広がる本の染み
 吉日の仏像開眼花ぐもり
 花ぐもり木に性別のありにけり
 水蹴つて堰を一気に小鮎哉
 天上に偲ぶ名あまた花曇り
 若鮎や谿流沿ひの峠茶屋
 武蔵の名冠す小苑花ぐもり
 点点と落花の椿二条城
 手を止めて春の蟬聞く野点席
 養花天若人の像海を指す
 花曇り疎水をめぐる手漕舟
 鮮かな三色だんご花曇り
 鮎の子の流れに解けて水匂ふ
 花曇りデイズニールランドは砂漠の夢
 万能に効く薬売り養花天
 すべすべの小石を拾ふ花曇
 花曇並ぶ地藏の目のやさし

大塚 茂子

池田 雅夫

池田 珪子

町野 広子

鳥羽 和風

椎野 美代子

田寺 玲子

島津 初花

藤澤 喜久

内田 恵子

花曇り会ひたさつのる旧知なり
 溪流に若鮎群れて過疎の村
 若鮎や生家の跡は草の原
 花曇奈良の都に西東
 小鮎まだ汚れを知らぬ眼まなこして
 勢ひ良く小鮎放たれ消えにけり
 若鮎やふる里自慢川自慢
 掌中の小鮎のいのちあたまか温し
 万愚節一点物と誑かす
 揚雲雀やがて真青の空の点
 遥かなる山の端霞む養花天
 花曇一輛車行くローカル線
 花曇り久しき友と酒の午後
 籐椅子にペディキュア赤く花曇り
 濡れ縁に座ぶとん五枚花曇り
 垣根越し庭石値踏み花曇り
 老医師の白衣新らし花曇り
 笑ふ目の牛の涎や花曇り
 藤まつり姐さんの手に点袋
 釣り上げられて緑の中に舞ふ小鮎
 花吹雪しきり野点の緋毛氈
 若鮎の急瀬さ走る気高さよ
 秒針は命の鼓動養花天
 越し方の話いろいろ花曇

南條きわゑ

日吉亜弥子

日高道を

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

梅澤佐江

〃

〃

みどり児の足の力や養花天
 若鮎の水に刺さりて堰越ゆる
 をんな等の集へば笑ふ養花天
 風光るスクランブルの交差点
 花ぐもりかすかな不安抱へし子
 鳥雲に入るまるで点描画のやう
 境内のつつじ織り成す点描画
 琴の音包む野点やうらけし
 ふらここや頂点の子の自慢顔
 寄せ植ゑはバステルカラー花曇
 花ぐもり今にも雨が落ちさうな
 鮎の子を俯瞰してゐる鳶の子
 夫の声聞かぬふりして花曇
 生返事してゐる妻や花曇り
 点になり線になりたる夏燕
 花曇りこわれた膝のレントゲン
 ほんのりと稜線融くる花曇り
 定刻の日課の散歩花曇
 さよならの語尾のほやける花曇
 見え過ぎる術後の眼花ぐもり
 花曇けふは太めに眉を描く
 花ぐもり白寿をたたへ葬送す
 鮎の子や潮上の無事を祈りをり
 「おいでやす」に誘はれ入るや花曇り

梅澤佐江

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

平野 楽
 保坂 翔太

私の三句

日高道を

秋惜しむ地の塩となる余生かな

私は、キリスト教の信者ではないが、学校がキリスト教系であったため授業の中にキリスト教概論やチャペルタイムがあり、スクールモットーである「地の塩、世の光」の考え方は自然と身に付いた。

今、七十歳代も半ばに差し掛かると、自ずと来し方を考え、残りの人生を自問自答しているのである。

街に出よ浮かれ猫にも誹諧味

この句は以前会社の仲間と谷根千（谷中、根津、千駄木）を散策したとき、街の至る所で猫が自由に生活しているのを思い出し、再び吟行したときの句。

ところが、以前は街の至る所に猫がいたのだが、数が随分と減っていた。なんでもあまりにも人が大勢押し掛けたので猫がにげだしたとか。

その替りなのか、街には至る所に猫の置物が置かれている。皆さん、街に出れば、いろいろな句材がありますよ、という吟行礼賛の句。

母の日はいつか妻の日二人旅

これまで俳句で妻を詠むときは、照れ隠しもあり、大いびきや寝返りの足の重さ、あるいは油照に例えたりと、あまり素直ではなかった。

しかしこの齢になつてくると、母の日を祝ってくれた息子達にも家族が出来、孫たちには息子のお嫁さんが母の日の対象となつて、妻も少し寂しそうであり、いよいよ私の出番かなといったところがこの句の本意である。

「おまえ百までわしゃ九十九まで、共に白髪の生えるまで」お互い健康で穏やかに過ごしたいものである。

私の俳句の作法

私が水明に入会し俳句を始めた時、当時の主宰が仰った言葉「作為を捨てて、余韻を残せ」を、私の句作りのモットーとしてきた。しかしながら、この「作為を捨てる」ほど難しいこともまたないのである。

こればかりは、もつと人間の修養を積まなければならぬ。ただもう一方の「余韻を残せ」のほうは、技術的に何とか対応出来るかもしれない。

「余韻」あるいは「余情」を生む根源は「省略」によるものである。

俳句とは言葉を惜しむ短詩と言われる。

僅か十七音の中に全てを言わず、省略によって「余韻」が出せれば、それは少し目標に近づくことが出来たのではないだろうか。

私の三句

青木鶴城

白南風やいまだ屍の聲乾く

反戦を意識した句である。第二次世界大戦における南方戦線での戦死者は膨大な数を数える。乾いた南風が吹くたびに戦没者の聲が聞こえてくるような気がするのである。金子兜太の『水脈の果炎天の墓碑を置いて去る』の句が私の琴線に触れたのは言うまでもない。彼がどんな気持ちで南方戦線後にしたか、この句からの叫びを感じるのである。

現在も世界中のあちこちで戦争や国内の紛争が起きていて、おびた、だしい人命が失われている。主義主張とは、宗教の教義とは、民族とは。果たしてそれらは人の命よりも大切なものなのか。人の命が軽んじられている今を危惧する。

考えれば考えるほど人間の愚かさを痛感せざるを得ない。個の力は弱いもので、我々が発信する俳句がどれだけの影響力があるのか知る由もないが、文人の仲間入りをした以上声を上げ続けることが使命と感している。

カタツムリ地球の果ての遠きこと

色んな物や色んな事に興味が旺盛だった私は、何にでも手を出してきた。やってみれば何となく上達してしまう才能は

両親の遺伝子のお陰なのだろう。だが、この器用さが結果的にはどの道においてもオーソリティーになれない器用貧乏であったような気がする。結局は道を究める前に満足してしまふのである。カタツムリの速度でも地道に目的に向かえば地球の果てに辿り着くことが出来たかも。

スウィングの俄ドラムス年惜しむ

スウィングとはジャズのリズムの事。なんと今七十の手習いでドラムを叩いている。学生時代に軽音楽部でアルトサクスを吹いて、当時麻疹のように流行りだしたフォークソングでギターを覚え親しんできた音楽活動だが、社会人となつて練習の機会もなくなり、いつしか楽器を手にする事が無くなっていた。そんな折りにドラマー不在のバンドから声がかかり、学生時代に戻りドラムを叩いてみることにしたのである。

生来の器用さから何となく様になる程度のレベルにはなつたものの、ドラムの世界もそれはとても深い。スウィングを極めて、ドラムソロに喝采を浴びる日を夢見ている。学生の乗りもいつしか後期高齢者。

私の三句

檜鼻 ことは

白团扇草の庵に墓ふたつ

渡月橋を離れ奥嵯峨に入ると、やがて人もまばらになり、藁葺き屋根の民家や古い町並みが見え始めます。落柿舎より、二尊院、祇王寺、化野念仏寺、愛宕念仏寺あたりまでの散策は実に楽しいものです。数年前、久しぶりに奥嵯峨を歩いてまわりました。初夏でしたので、新緑に包まれた祇王寺は特に美しく、静寂の中に身を置くことができました。

その昔、平清盛の寵愛を受けた白拍子の祇王が清盛の心変わりにより、母・妹とともに出家、往生院にあった庵に入寺します。後年、往生院は荒廃しますが、庵は尼寺として残り、いつしか祇王寺と呼ばれるようになりました。竹林と楓に囲まれ、苔が美しいつましやかな草庵の佇まいに、もののあるわれを感じたひと時でした。

駅の名に魅かれ途中下車の秋

さて嵐山より、帰りは嵐電。京福電気鉄道嵐山線が正式名称だったのですが、数年前より愛称「嵐電」が正式名称になったということ。嵐電には、蚕ノ社や帷子ノ辻など、そ

の名の由来を知りたくなるような駅名がいくつか。学生時代、四条大宮より嵐山に向かうつもりで乗った電車を途中下車し、帷子ノ辻駅で降りたことがありました。

嵯峨天皇の皇后 橘嘉智子は世に類なき麗人。仏教に深く帰依した皇后は、諸行無常の真理を自らの身をもって示すため「死に臨んで亡骸は埋葬せず、どこかの辻に打ち棄てよ」と言い残します。遺言の通り風葬された場所が「帷子ノ辻」であったということです。他にも途中下車したことのある思い出はいくつかありますが、今回はこのへんで。

ほどほどに数へて手酌除夜の鐘

三十代の頃は八人居た家族でした。祖父母を送り、父母を送り、弟を送り、子は嫁ぎ、今では夫婦二人の生活です。それでも一応の責任を果たすことができたというような安堵感があり、健康寿命を保ちながら二人でなんとか元気に日々を過ごしていけたらと思うこのごろです。そのようなわけで、夫婦二人での年越し。最初の一杯は注いでもらってあとは手酌。先ず今年無事めでたく千秋楽。菩提寺の鐘を聞きながら良い年になりますようにと願いつつ新年を迎えた次第です。

山本鬼之介 選

水明集

ささやかに水脈ひく蛇や月明り
涼風やメレンゲの角つと立ちぬ
藤椅子の父の形に包まれたし
老いて死ぬ人は幸運ほととぎす
半夏生日本銀行券新た

眼のひかる檻のライオン夏の月
幼子の供花の鈴蘭野の仏
汽車喘ぐひと山越えの夏至の宵
鈴蘭の径を喪服の老男女
山裾へ裾へ早苗の千枚田

伊奈 菅原卓郎

さいたま 小林京子

小悪魔の八重歯にきらりさくらんぼ
全快の膳に二対のさくらんぼ
岸の葦薙ぎ倒しゆく大出水
沢蟹もそれを追ふ子もすばしこく
出水後や道にボートの救助隊

さいたま 新 曆文

桑の実や指に染み入る里の色
独り居の雨戸ことりと君影草
ゆるやかに田水流るる植田かな
人声も水際も遠し夏河原
出目金眠る江戸の名残の金魚坂

越谷 阿部幸代

澄みわたる水面に夢の水芭蕉
古民家の庭は緑蔭まつ盛り
カンナ咲く思ひ出の坂登り切る
涸れ果てて水なき夏の最上川
井戸水を口に含めば夏の月

さいたま 山岸久美子

ひつそりと隣家覗くは七変化
ばらばらと庇を叩く濃紫陽花
風薫る英気吸ひ込む旅途上
夏つばめ漆喰映ゆる民藝館
薄暑光鳩にねだられ飯の粒

寺町知子

例幣使街道走るはたた神

滑り台でんでん虫が上りゆく

ピリカピリカピリカの森に君影草

振花が今朝もねぢれて側溝に

ブラインドの隙間より来る今朝の夏

さいたま

飯田忠男

そよ風の運ぶ魚鼓の音梅雨晴間
松蟬の一声だけや立石寺

まどろみを蝦蟇の邪魔する仮寝かな

耳打ちも目配せもせず親鴉

橋桁に木馬一頭出水かな

さいたま

池田珪子

生垣は今つる薔薇の晴舞台

紅薔薇や鉄扉の奥の放れ犬

梅雨晴や駅弁買って旅気分

梅雨晴間俄大工にペンキの香

たましひの抜けし盛り場灯蛾の高

森美枝子

沢蟹の小さき足跡追ひつづけ
飯説たて議論百舌すだれ越し

紫陽花の庭一面の仮住ひ

突然の梅雨の出水や大瀑布

母はまだ達者荷札のさくらんぼ

篠崎紀子

風紋の乱るる砂丘青嵐

青嵐保存極むる白川郷

天守より味はふ天下風薫る

夏の月閑かに凜と廢駅舎

かたつむり見せつけ戻す葉の陰に

岡田宣子

薫風の抜くる古民家二胡の音
民宿の海辺賑はず透かし百合

鈴蘭に呼ばれたやうで鉢ひとつ

夏の夜の集ひ昭和の流行り歌

恋なれば拾うてみたや更衣

清水桂子

山峡の瀬音軽やか夏の川

夜を生きて玻璃戸を叩く火取虫

火取虫憑かれたやうに身をこがす

青青と噴き出す息や夏木立

人に酔ふ大仏囲ふ夏木立

菅原真理

くちなはが通せん坊の散歩道
梔子の白に心を癒さるる

近づくや葵祭の御所車

夏木立声なき声を秘めたるや

バス停に日毎日傘の競ひあふ

平塚

丸屋詠子

六月や傘の彩る通学路

涼風や湯上がり映す玉鏡

蛇口より漏るる水音五月鬮

沙羅の花魚鼓の鳴りたる古刹かな

半玉の濡るる朱唇や冷奴

さいたま 反町 修

さいたま 加藤でん治

夏出水名水の郷いたましまや

せきせきと蟹わたりゆく岨の径

蟹を観て缺巨大に幼児の絵

仮住ひの庭にあざやか凌霄花

幸せの真ん中にゐるさくらんぼ

霜多光代

本橋稀香

冠水に星の映ろふ出水かな

幽谷の岩を一途に攀づる蟹

桜桃や尾根の夕陽を染め上げて

虫干の本より父のラヴレター

参拝の繁き惣社の夏祓

皆川更穂

杉戸 佐々木史女

葉柳や放水橋の下を舟

待つよりも待たせる辛さ桜桃忌

母に似し姥と岩風呂蛇の衣

夏至の夜のフランス映画ヒロイン死

蠅虎を潰さぬやうに跳んでみる

森下山菜

さいたま 綿引まりこ

蒼林の湧水ゆたかなる六月

六月は吾の生れ月や水光り

紫陽花や軒の雫を七色に

老鶯や巖美河岸に飮して

伽羅路や酒豪揃ひの居残りぬ

退職の無聊や目高を友として

ちくちくと妻の小言や袖の花

蛇の衣卒塔婆に絡む成就かな

独り居の父の自適や夏衣

束の間の旨寝やひとり夏座敷

忌を修し帰路に老者の草笛を

城址をつつむ老者の草笛よ

万緑や湘南合唱団と同行す

万緑や古城にかかる雲が切れ

万緑や大聖堂の懺悔室

虹立ちて保育器の吾子笑ひ入る

梅雨晴や酢飯を扇ぐ朝の風

梅雨晴や白鳩放つ大聖堂

洋館は浪漫の香り白薔薇

螢火や捨てし指輪は戻らざり

神宿る熊野三山五月闇

五月雨赤ちやうちんに灯の点る

五月闇白じら明くる紅き空

青梅や店に鎮座の紀州産

六月の花嫁祝ふ玉杯ぞ

夏暖簾分け入れば時ゆつくりと

和菓子老舗の染抜き屋号夏のれん

街灯の下は天下ぞ火取虫

朝練の掛け声響く夏木立

子育てに正解はなしソーダ水

手を繋ぐ後ろ姿や柚子の花

酔ひしれて妻の一言柚子の花

紫陽花を生けて白雲遠ざかり

息されて山懐に柚子の花

姿見の面影辿る夏衣

夏旅の永久の印や鈴守

鳴き竜や跣足の群れのまた動く

汗をかくるたかわからぬ眠り猫

神輿舎や三基の神輿は闇の中

植物は息をするのか青嵐

さいたま 千坂平通

竹澤和子

鈴木香音子

吉川拓真

ほととぎす目覚めさせたる過疎の村
螢火や愛する人の突然死

一匹の螢を寝間に放ちけり

父の日や大きな箱の届きをり

ガラス器に盛られしサラダ夏めきぬ

入相に冷酒染むる胃の腑かな

濁流をベクトル描き渡る蛇

蛇平手打ち踏鞆を踏みて止まる猫

彼の国の栄える源は昼寝かな

三尺寝野良の片隅ぐずる子ら

稲作の潤ひ願ひ夏の川

石の下動く曲者夏河原

笹舟を応援する子夏の川

興味津津昼寝装ふ青蜥蜴

瑠璃蜥蜴見て見ぬ振りの昼下り

蛇出でぬやけに夫の背広く見え

そよ風に揺るるカーテン昼寝どき

かたつむり一日かけて徒競走

青嵐応援団旗ひるがへる

防災無線昼寝の夢を揺さぶりぬ

若狭 山崎郁子

利根町 倉田星歩

さいたま 緒方みき子

吉川 杉浦千祐

棋士扇ぐ指し手に窮し秋扇
寄り添ひて秋刀魚焼きゐる老夫婦
運動会びりに拍手の鳴り止まぬ
若者の小洒落駄洒落や水すまし
小振りなる粋な御輿や昇く老衆

さいたま 香田裕誌

富士映す湖やボプラの夏木立
しつとりと夏暖簾ゆれ西の窓
外灯に火蛾の稀なるこの時代
夏木立抜け三四郎池ひつそりと
正直にいつか話さう夏の雲

森下美智枝

ぼうふりや山門はたの手水鉢
涼しさや切りし豆腐の角きりり
稲荷鮭母の作りし甘き味
梅雨寒や我が肩先を抱きゐて
涼しさや墨痕淋漓大家の書

さいたま 小山あつ子

見せ所ライトアップの群海月
七化けや上へ下への海月かな
風薫る父と娘のまり遊び
彫刻に乗りて遊ぶ子風薫る
薫風やスケートボードの二人連

小駒さち子

夏暖簾通りすがりの雨宿り
悪役の火蛾も溶けこむ能舞台
小腹空き出しの香りに夏暖簾
薫風や旧校舎いま道の駅
登山道木洩れ日招く夏木立

小川洋子

花南瓜アピール強し朝の空
聞き分けの良き子見守る茄子の花
弧を描き飛び込むボール虹の輪へ
先生の沁むる忠告青芒
通学のペダル踏む列夏木立

若狭 岡本祥子

影ゆるる空を塗りゆく青楓
風を巻き鉄線の蔓巻き上がる
黒堀の誘ひ込む路地若葉風
竹落葉石碑にひらり空を来る
気だるげに猫が行くなり日の盛り

蛭田律子

大小の浜の足跡卯波寄る
停泊のコンテナ船に卯波寄る
初夏や長袖たぐり散歩中
姿よし味よし山女旅の宿
溪谷に一人寡黙に山女待つ

さいたま 武田重子

幾何学を描く棚田や螢狩
紫陽花や京の古刹に二万株
夏の峽桂の葉つばハート型
紫陽花や花浄土なる京の寺
虹立ちて二泊三日の良き知らせ

若狭 畠中八重子

空き瓶に薔薇が一本駐在所
古着屋で買うておしやれの更衣
梅雨晴や二千歩目指す試歩の杖
湯治場の淡き電灯火取虫
夏館サザンの海を一望す

さいたま 大熊健司

漆黒の夜の静寂や滝の音
名店の列なす客に青田風
田んぼ道蛇しゆるしゆると横断す
ファミレスのキッズメニューや夏来たる
子育ての時は彼方へ螢狩

松村笑風

梅雨晴やハンバーガーの濃き匂ひ
終電の終着駅やビール買ふ
幽明をさ迷ふ音や火取虫
酒樽の名にし負ふ銘風薫る
領海を犯し寄せくる海月かな

秋谷風舎

薫風や少し開けたるバスの窓
若葉風社の笙の音色かな
若葉寒名のかすれたる追悼碑
母の日の照れる少年花を置く
田の水満つる燕三条風薫る

さいたま 阿部貞代

風薫る腹式呼吸できぬまま
風薫る子らの忘れしサッカーボール
風薫る手を上げ渡る青信号
風薫る二人乗りするベビーカー
薫風や子らと登りし高尾山

東京 畑宮栄子

逝く妻にかぶせあげたし夏帽子
不揃ひの粒こそ良けれ青葡萄
反抗期まだまだ喰へぬ青葡萄
夕風のしまなみ海道ひとり行く
塩田に夕風のくる暑さくる

門真宏治

絵硝子の物語聞くリラの雨
ふんはりと白薔薇挿して母の部屋
首筋の黒子がちらり更衣
公園の昏き一灯火蛾の群れ
梅雨晴の氷川の鳥居天を突く

さいたま 穴戸洋子

あぢさゝるや狭庭にどんと咲きにけり
夕焼や地球の端を燃えつくす
梅雨晴や破れ襖に絵を貼りぬ
舞誘ふ部屋に飾りし京扇
古民家の縁にぼつんと螢籠

和歌山 南條きわゑ

火星から墜ちて海月に転生す
足挽げし海月のんびり浮いてゐる
薫風にシャツ干せばシャツ百花の香
薫風や機影八雲に突入す
薫風やブロンズ像はなほ碧し

さいたま 横山礼子

サンガラス地下街を往き落ち着かず
昼顔の声なき声を掬ひ上ぐ
梅雨じめり満艦飾のパチンコ屋
紫陽花の歓迎に会ふ雨の後
タワーから静かに整ふ増上寺

東京 柳父はる

タオル手に薄暑の街を歩きけり
犬と散歩木蔭うれしき街薄暑
愛読書もて長椅子に梅雨の午後
梅雨晴や学童の声高らかに
脇道へそつと置きけり落し文

高原和子

重たげに雫を抱へ朝の薔薇
更衣親子で違ふ曇み癖
花嫁の父は口下手梅雨晴間
校庭に声の飛び交ふ梅雨晴間
夜明かしのゲームセンター火取虫

上尾 室井早都子

マンバウの口より出づる海月かな
水海月傘のダンスの夜会かな
風薫る羽後と陸奥との国境
湖の石の揺らぎや風薫る
薫風や遊覧船に中国語

樋口元美

者付けたる加賀太きゆうり夕の雨
青梅が天神さんに落つる音
額の花遣らずの雨の音もなし
身振れば鉄色増せる太みみず
玄関のやたらごつちやり梅雨に入る

大阪 遠藤人美

笹百合や遠きあの日が甦る
主無くも我はゐたりと十葉群れ
大空に香り放つや泰山木
美容室の自惚れ鏡七変化
家中の灯りを落とし螢放つ

和歌山 嶋田洋子

山笑ふ富士の湧き水清々し
家守る山吹の垣今盛り

さいたま 高山みどり

小石蹴り蝌蚪脅かす通学路
母の日や考のビデオを母と観る
車窓から色とりどりの谷若葉

目の合うて狼狽ふる妻青蜥蜴
縁石で猫と対峙の蜥蜴の子
廃れ家の屋根に石榴の花の咲く
黒南風や妻の昼食會長し
節々の痛みの増しぬ梅雨に入る

さいたま 鈴木藻好

梅雨晴や重機列なすプロジェクト

篠原さよ子

夏衣纏ふ鏡に母を見ゆ

羽島秀子

身頃あて姿見問ふや更衣

茶断ちせし母の遺影に新茶汲む

梅雨晴やベランダ履きのひだり右

金継ぎの備前に冷酒父忌日

三尺寝頬を打ちたるテレワーク
川辺りの水面にとどく草いきれ

海月浮く波の間に壇ノ浦
鈍行の乗換へ駅のソーダ水

道造り飯場の夜の冷し酒

播磨 進

リスナーのリクエスト曲ソーダ水

石関六弦

音も無き庭に深紅の薔薇五輪

DJのジョーク掻き消す夕立かな

梅雨晴れや古希の妻へのレストラン

本館は人まばらなり時鳥

父の日や紙飛行機を飛ばしけり

右折する緊急車両走り梅雨

梅雨明けや美容サロンの青二才

ほうたるやもう少しだけるてあげる

短夜に小さきものの羽音きく

川 口 新井のり子

陽光に碎けし濤や海月浮く

糸井しるく

子の留守に指で銭亀追ふ遊び

寄せ波の碎けて海月漂へり

亀の子が寝てゐるうちにはつと晴れ

風薫る山寺駅や芭蕉の世

菜を摘むや市民農園風薫る

風薫る尾瀬の木道遠き日よ

短夜や動くものなく声もなく

麦の秋今年も嬉しや小判顔

樹林帯抜けて茅戸や風薫る
老杉の時刻む幹風薫る

さいたま 前田夏野

青光り惹かれ群れゆく海月かな
玻璃越しの妖しき海月我浴かす
故郷の駅遠のくや沙羅の花

フジ子ヘミンクの苦難とピアノ初夏に逝く
初夏の海照りて彼方の烏帽子岩
小さき家の小さき庭の文字摺草
四万十は夏青年となりし吾子
小学生集ひて遊ぶ夏野川

宮代 関谷多美子

通る度睨みを効かす親鳥

東京 桐山遊童

明かりつけ動く家守に安堵せり
でむしよお前は何処へ行くのやら
向日葵の見つむる先は眩しすぎ
炎天下時計見ながらやる作業

湯上がりの火照る身体や夏の月
火取虫離れし家族の遠灯り
独り身の夜のコンビニ火取虫
梅雨晴や夫のメールに呼びだされ
警官や保つプライド五月闇

さいたま 川島夕峰

嘴に大空翔る蚯蚓かな

大阪 飯塚智恵子

蝸牛殻はレコード雨の詩
太蚯蚓一直線に通せん坊
特攻の蜜蜂狙ふふぐりかな
常夜灯ほのかに染まる白紫陽花

青葡萄無口いつしか饒舌に
垣間見のお隣りの青葡萄かな
夕風や皿数多き海の宿
五月晴目的のなき旅路かな
夜濯やのの字を描くはくる水

木谷葉子

夕風や句碑を巡りて坂の街
夕風や小さき宿の若女将

さいたま 石井直子

梅雨晴や傘寿の声の伸びやかに
蕎麦打のこねる手触り梅雨湿り
ラジオより悩み相談夏に入る

鉢手入れ夕餉遅るる夏至の庭
夏至来たる傘寿の姉に傘贈る
左遷され虚な朝に行行子
徹夜明け寝かせておくれ行行子
もう一本欲張るサーファー夏至の海

北出久美子

ドーナツの真ん中通る薄暑光
「坊つちゃん」のだんごを喰らふ薄暑かな
通学路走り薄暑の水溜り
紫陽花や我慢強さは母譲り
信金の紫陽花を撮る異邦人

さいたま 平野 楽

びわの実の色あざやかに光りけり
青柿も日に日にふとる雨の午後
六畳の仏間あかるきすかし百合
でで虫のやつと到着丸木橋
山道を登れば麦の匂して

藤岡 加藤ナヲ子

神楽殿素早く逃れ蜥蜴かな
灰色の都会は砂漠青蜥蜴
灯台の白さ際立つ青蜥蜴
夏川に遊ぶ弟守る兄
夏川や水力発電今もなほ

所沢 飯室夏江

手塩にかけ袋もかけて青葡萄
青葡萄自由研究未完成
夕風やコンビニナートのシルエツト
夕風や篝火燃ゆるレストラン
荒梅雨や予報の数字記録的

さいたま 三浦真由美

橋の上三色の鯉寄り来たり
丹頂の鯉の葉蔭に蒼ざめて
深きより予言を告げに黄金の鯉
デパートの屋上に買ふ錦鯉
はにかみてスケッチする父錦鯉

東京 山中いちい

裏庭の鍵を失くして青葉闇
夏館ねち締め直す宣教師
理事長のこて薫風の中庭に
星涼しクイズの好きな料理人
この宇宙に青き星あり水羊羹

横浜 石井妙子

子つばめの糞のひと山小雨降る
竹の皮脱ぎて緑のあざやかに
味噌つけて二人で分けあふ初きゆうり
弓なりに倒れむばかり立葵
螢袋ゆれて小犬の尾のごとし

鬼石 榊原聰子

腫瘍取るそれだけの事梅雨近し
梅雨寒や「パンツ脱いで」と手術助手
短夜の消灯九時や眠るだけ
個室無聊蚊などが来れば友とせむ
梅雨晴れや2gだけのダイエツト

さいたま 駒谷行雄

到来の筍飯に舌鼓

さいたま 湯浅 和

リハビリを励ます窓に青嵐
夏館赤いボルシェが空ぶかし
探偵のパイプくゆらす夏館
主なき揺り椅子に風夏館

夏館立身出世の淡水鯉

落合和枝

筍と大地の恵み背に受けて
豪邸の犬息粗く夏館

竹の子や天空向かひ皮を着て
筍と色鮮やかなサラダ飯

辻々に案内人立つ螢狩

藤 沢 小島喜代子

昨日は雨今日で良かった螢狩
藤は実に投句の期限迫り来る

切り落とす垣の紫陽花ばつさばさ
車椅子カメラ構へて舞妃蓮

ふり返るなんだ坂こんな坂あちさぬ坂

東京 深沢りこ

船橋屋緋鯉六匹客迎ふ
狭い池ゆつたり泳ぐ緋鯉かな

夏至の日や訪問介護急ぎ足
どくだみや十字架の如花並ぶ

ぼつり来た聞いてないよと夕立雲
夕立か全力疾走後二分

さいたま 小田三茅

溜息やゆだちの仕業また洗ふ
言ひ忘れ戻る暇なし夕立雲
新聞を靴のつま先夕立かな

父の日の父の似顔絵紙ひかうき

山下ユリ子

梅雨じめり異次元ひそむ美術館
あちさるに囲まれ孫の秘密基地
梅雨最中こはれし傘の捨てどころ

夏衣浜路の小貝くるぶしに

草 加 持 永喜夫

ソーダ水喉の奥から金の泡
アロハシャツ雨に浮びし真珠湾
五月闇マニキュア拭ひ泣き寝入り

郷里へ霧を掻き分け列車行く
掌で月夜の香り抄ひたる

所 沢 関根千恵

何もかも忘れ満たされ花野原
地球から力いつぱい大根引

春休み延びて幼と芥子畑

藤 沢 藤田寛二

風邪休み爺婆孫や白マスク
夕富士を背にして薔薇に酔ふ春ぞ

作品鑑賞

山本鬼之介

籐椅子の父の形に包まれたし 小林京子

和風住宅の広縁、洋風住宅のリビングルームやサンルームなどに置かれた籐椅子が醸し出す安らぎの雰囲気実に佳い。子供の頃や若年の頃にはあまり感じなかった籐椅子の魅力が、加齢と共に二倍にも三倍にも増幅される。であるから、所々傷みが出てきても、二代・三代と使われることもあり、使われてきた歲月によつて籐に独特の艶が生まれ、それに座つてきた人の人生と呼応する籐椅子なのである。

作者が身を任せている籐椅子もその様な味わいのある物で、そこに身体を預けていると身も心も解放され、溜まつていた疲れが霧散する。籐椅子に宿っている父上の魂が、作者を愛おしんで優しく包み込んでくれるのである。

水明発行所の近く、高砂小学校の塀に面した場所に、籐製品を扱う店がある。籐椅子は勿論、減多にお目にかかることのない籐寝椅子もある。以前、この店で籐の小物を買う機会があり、女性店主からいろいろ話を聴いた。日本国内は勿論、

海外からも籐椅子や籐寝椅子などの修理依頼があるそうで、天然素材である「籐」の価値観を再認識した。

山裾へ裾へ早苗の千枚田 菅原卓郎

海と山との間に平地が少ない日本海側の新潟県から富山県にかけての地形を思わせる俳句である。離れた場所から眺めると、山の中腹から山裾までつづいている棚田の美しい景色が明らかになる。永い年月の間に従事した人々の弛まぬ努力と卓越した業によつて培われてきた千枚田である。恙なく育つた早苗の田植えが始まるうとしている時期。植田から青田そして、稔り田の美観を心に描き、じつと棚田を見上げている老農夫の姿を窺うことができる。千枚田の美観と其処に加わる人物像を無駄なく的確に捉えた秀作である。

岸の葦薙ぎ倒しゆく大出水 新 暦文

この記事を書いている最中にも、山形県と秋田県に集中した大雨による甚大な災害ニュースが伝わってくる。耳で聴くだけではなく、新聞やテレビによる被害状況写真や映像に声を失うばかりである。普段は自然美を作り出している河川が、猛り狂った濁流となって田畑や人家を侵してゆく状況を観るにつけ、自然災害の恐さを再認識する。

平時であれば葦切の囁しい声が聞こえてくる葦の岸辺であ

るが、土ごと葦を削り取ってゆく水の力を表した躍動感のある俳句である。線状降水帯に加えて雷・突風・竜巻など、気象予報士の解説が、決して他人事ではないと思う昨今である。

桑の実や指に染み入る里の色 阿部幸代

桑の木や桑畑のある土地に生まれ育った人なら大方が体験していると思われる桑の実の汁である。黒紫色の実を食べる口の周りや指を紫色に染めた。その土地の多くの子が体験しているので恥ずかしくはなく、むしろ土地っ子の勲章のようなものであったのだと思う。作者も体験者の一人であったのか、「里の色」がなかなか効果的である。

カンナ咲く思ひ出の坂登り切る 山岸久美子

坂道の途中の家に咲いているカンナの花を眺めながら登っている。以前同じ季節にこの坂道を登ったことがあり、その日に何か特別のことがあって懐かしい思ひ出になっている。時が経っているのにカンナはその日と同じように咲いており、時が停止したような不思議な思ひがした。「登り切る」に、現実に戻った心情が詠まれている。

ひっそりと隣家覗くは七変化 寺町知子

色彩を変えながら花株を増やしてゆく紫陽花に、動物的な

要素を感じる。隣家との境の生垣に咲いている紫陽花が、背伸びして覗き見しているような気がしてくるのも、その花が持っている特徴なのであろう。『やめなさい』と声を掛けたくなるような不思議な花なのである。

例幣使街道走るはたた神 飯田忠男

江戸時代に、京の朝廷から日光の東照宮の神前に捧げる幣帛を届ける勅使が通った街道が「日光例幣使街道」である。現在の高崎市→伊勢崎市→太田市→足利市→佐野市→栃木市→鹿沼市→日光市を結ぶルートであり、鹿沼市から日光市にかけて当時の杉並木が現存している。

さて、このルートは発雷の多い土地であり、特に栃木県の雷は有名である。その昔、例幣使が威張って通った街道を、雷公が走って行くという発想に作者の人物像が投影されていて面白い。

自転車で数回往復したことのあるこの街道は、筆者にとって想い出深い路の一つである。

たましひの抜けし盛り場灯蛾の嵩 森美枝子

上五から中七にかけての措辞をどのように解釈するかによって、この句の趣が変わってくると思う。居酒屋やスナック・キャバクラなどの店が軒を連ねて活況を呈していた盛り場が、今は時代の流れの中で衰退し、見る影もない状態になってい

る界限、という句意かと思うが如何であろうか。残っている店の看板灯や外灯に群がる蛾は、今なお隆盛を誇っているように、そのアンバランスな様子が不気味である。なかなか鋭い感覚の俳句である。

夏の月閑かに凜と廃駅舎 岡田宣子

廃駅舎という言葉から類推して、当然のこと廃止された鉄道の路線と使われなくなつて錆の生じた線路の様子が見えてくる。沿線の利用者の減少に伴つてこの路線の殆どの駅が駅員の居ない無人駅となり、遂に路線自体が廃止の憂き目に遭つたわけである。併し乍ら、使われなくなつたこの廃駅舎は、有人駅の頃と変わらぬ風格を維持しており、夏の月光の下でその存在感示している。「閑かに凜と」に、物言わぬ駅舎の悲痛な心の内が示されている。

夜を生きて玻璃戸を叩く火取虫 菅原真理

日中は姿を見せぬが、夜になると何処からか現れて灯火を慕い狂う蛾の生體であるが、うっかりして窓を開けようものなら、室内に飛び込み鱗粉を撒き散らす厄介な昆虫である。

朝になつて窓の外を見ると、数匹の蛾が地に落ちて死んでいくこともあり、「夜を生きて」の言葉の重みが理解出来る。

橋桁に木馬一頭出水かな 池田圭子

建物の浸水や田畑の浸水、人や家畜の死傷など、甚大な被害を伴う大出水によつて、河川にいろいろな物が流れてくるが、木馬が流れてくるのは稀なことだと思ふ。これが作者の想像によるものか、それとも、実際に見たり伝え聞いた話によるものなのか、大いに興味が湧く。それはさておき、そもそもその木馬が何処にあつたものなのか、次の疑問となる。近郷の神社に奉納されていた木馬か、洪水によつて破壊された遊園地の回転木馬の一頭かがその答ではないかと思ふ。

沢蟹の小さき足跡追ひつづけ 篠崎紀子

沢蟹の数や大きさにもよるだろうが、足跡はごく微細なものである。そのような足跡を追いつけるということは現実的でないから、実際は作者の眼前に現れた沢蟹に興味を抱き、それが岩陰に隠れるまで眼で追いつけたという句意かと解釈した。「小さき足跡」は実に繊細で詩的な表現で、この措辞によつてこの句が確立したと言つてよいだろう。

鈴蘭に呼ばれたやうで鉢ひとつ 清水桂子

鈴蘭は、花の形状のイメージとして先ず「可憐」という言葉が浮かんでくるが、季語の傍題である「君影草」からは、

当然のこと人間的な存在感がイメージされてくる。

気分転換に庭に出たら誰かに声を掛けられたような気がして、眼を転じた先に鈴蘭の鉢があった。

近づくや葵祭の御所車 丸屋詠子

葵祭については、歳時記にもいろいろと解説が載っているが、京都三大祭（五月の葵祭、七月の祇園祭、十月の時代祭）の一つで、五月十五日に開催される上賀茂神社と下鴨神社の祭礼である。祭の起源は六世紀半ばでかなり古く、藤原時代には定着していた。江戸時代の元禄七年にこの祭が再興されてから賀茂祭が葵祭と呼ばれるようになったと記されている。平安朝後期の宮廷装束に身を飾った男女が八kmの道を行進する祭行列の見物に多くの人が集まるが、何と言っても圧巻は、薄紫の藤の花で飾られた御所車[〓]牛車を目前にする時である。作者の興奮した息遣いが聞こえるようだ。

沙羅の花魚鼓の鳴りたる古刹かな 反町 修

魚鼓^{ぎよく}は魚板とも云い、魚を模した木製の仏具で、禅寺などに吊されていて、起床・食事・就寝などの諸事の報せに使われる。沙羅の花は、六〜七月に咲く椿に似た白色大形の花のことで、本来の名は夏椿である。釈尊が樹下で涅槃に入った沙羅樹と間違えられて「沙羅の花」になったとのこと。

禅寺に鳴り響く魚鼓に沙羅の花が応えているようで、なか

なかい雰囲気をつくっている。

幸せの真ん中にあるさくらんぼ 霜多光代

果物類はいろいろあるが、さくらんぼの持つ魅力は、他のものとは別物のように感じる。特に、厳選された箱に取められたさくらんぼはまさに粒揃いで、それを取り巻く人の顔は、みな歡びに輝いている。「幸せの真ん中」が素晴らしい。

虫干の本より父のラブレター 皆川更穂

如何なる過程でこのような仕儀になったのか大いに興味がわく。この俳句の内容から推察すると、虫干した本は母の蔵書であり、結婚前に父から贈られたラブレターが本に大事に仕舞われていたのだと思う。なんとも微笑ましく、昭和の佳きアナログ時代が偲ばれる俳句である。

蠅虎を潰さぬやうに跳んでみる 森下山菜

蠅虎[〓]はえとりぐも。水明誌の巻末の「今月のはてな？」に載るであろう難解な文字である。季語の「蜘蛛」の中には出ておらず、「蠅虎」単独で掲載されているので、つい見逃してしまう季語の一つではないかと思う。季語の解説を読むと、よく部屋の中で見掛ける蜘蛛で、蠅虎が急に親友になったような気がした。作者も同様で、足下に来た蠅虎を踏みそうになって思わず飛び退ったのではないかと思う。

水琴窟

(七月号鑑賞)

池田雅夫

故郷に不義理いくたび霜くすべ

飯田忠男

「霜くすべ」は桑などが芽ぐむころの霜の害を防ぐため、
粃殻などを焚きくすべて煙で覆い、冷えるのを防ぐこと。久
しく故郷に帰っていない。親の安否が気になるものの、その
きっかけがない。故郷は今、霜くすべのころ、帰ろうかな。

蝌蚪の国水に梵字の揺らめけり

綿引まりこ

田や池に産みつけられた蛙の卵は十日ぐらいで孵化する。
梵字を書き連ねたように群れている「蝌蚪」。「梵字」の比喩
が独創的である。風に揺れる水面と蝌蚪の動きが重なる。村
上鬼城は〈川底に蝌蚪の大国ありにけり〉と詠んだ。

「阿形」立ち怒りの相や冴返る

竹澤和子

仏法の守護神としての寺の門などの両脇に立つ一對の仁王
像。右に「阿形」。左に「吽形」。どちらも「怒りの形相」で
ある。「冴返る」が、その怒りの程度を言い表わしている。

ベランダの菜園満たしゆく穀雨

岡本祥子

「穀雨」は二十四節気の一つで、太陽暦の四月二十日ごろ
にあたる。時候の季語ではあるが、植えられた穀物を潤す春
の雨の意をもつ。ベランダで育てている野菜に恵みの雨が降
ってきた。まさに「満たしゆく穀雨」なのである。

鐘の音のただよふ街や夕霞

秋谷風舎

「鐘の音」は「鳴り渡る」や「ひびく」などで表わされる
が、揚句は「ただよふ」と、独自の感覚で表現している。そ
こに惹きつけられた。「夕霞」の街に茫茫とかすむ鐘の音が
聞こえる。「夕霞」がその雰囲気を十分に引きだしている。

頭上注意施設の軒につばめの巢

阿部貞代

昔から民家と燕の縁は深いものがある。民家に限らず駅舎
などでも営巣する。介護施設であろうか。玄関の「つばめの
巢」の糞害を避けるために「頭上注意」と喚起している。頭
上注意を「」で括ることも有効な手段である。

花月夜ひとひら受くる運命線

飯塚智恵子

「花月夜」に魅せられた。「花」あるいは「月夜」の一方だ
けでも趣を感じる。月の夜に、散る桜の花びらを掌に受けて
いると「運命線」の上で留まった。運命的な出逢いが…。

小綬鶏に混りて聞こゆ子らの声

駒谷行雄

「小綬鶏」は低山から平野部に分布している。「チョットコイ」の鳴き声で知られている。放鳥されたものが野性化したこともあり親しみやすい。「小綬鶏に混りて」「子らの声」が聞こえ、あたかも一緒に遊んでいるように感じられる。

砂山の溶くる波間や磯遊び

木谷葉子

白く波立っていた冬の海が春になると、淡い藍色に変わり明るく感じられる。遠く潮の退いた大潮のころは磯辺で遊ぶのだ。砂を盛り上げてつくった山を磯の波が崩してしまった。磯の波は満ちるのが早い。「砂山の溶くる」が写実的である。

小さき部屋母から届く夏蒲団

佐野友夏

この春、独り暮しを始めたのだろう。六畳一間のアパートかも知れない。子を心配する母の心情がありありと表わされている。綿を薄くした「夏蒲団」。近ごろは「夏掛け」という、麻を用いたものやタオルケットが多く用いられている。

清明や駅の階段二段跳び

北山建治郎

「清明」は二十四節気の一つで四月の始め。「万物が清々と明るい様」をいう。心身ともに活気に満ちて、「駅の階段」を「二段跳び」でのぼってゆく。そんな若さがよみがえる。

山間をうぐひすの声鳴り響く

桐山遊童

「うぐひすの声」の透明感は比類するものがない。「ホーホケキョ」の声を聞くと、「ああ、春になった」と実感する。实景の「山間に」「鳴り響く」であろう。里を離れて山に入る「夏鶯」は声も大きく活発である。それを詠み分けたい。

三日月の Gondola 浮かぶ春の宵

関谷多美子

「春の宵」がなまめかしい余韻にひたっている。まだ暮れきらない西空に浮かぶ「三日月」。「三日月の Gondola 浮かぶ」と詩情豊かな表現が、メルヘンの世界へと誘う。その Gondola に乗ってはるか夢の世界へ行ってみたいものだ。

花を追ひ弘前城まで列車旅

小島喜代子

桜前線も東北地方に達するまでは数日を要する。関東はすでに満開が過ぎてしまったが、東北地方は咲き始めたばかり。その桜を追っての「列車旅」なのだ。青森県・弘前城は秋田県・角館とならぶ桜の名所。桜の旅を堪能したことだろう。

陽炎や去りゆくひとの影隠し

持永喜夫

「陽炎」は春の暖かい日差しに、地上や屋根などから水蒸気がゆらゆらと立ちのぼる現象である。幻想的な現象に「去りゆくひとの影」を重ねている。「影はるか」で余韻が残る。

俳誌望見 染谷風子

「菜の花」二〇二四年五月号 通巻七二七号

主宰 伊藤政美 発行所 三重県四日市市

昭和三八年三月、山口いさをが三重県四日市市で創刊。平成十五年四月、伊藤政美が主宰継承。「俳句は自我と伝習との調和の詩である。」をモットーとしている。

巻頭の主宰詠「春の雲」二〇句より五句抽出。

父の代の灰も残りて春火鉢
与せずに一寸の虫穴を出づ
桃の花誰かを想ふ歳になり
露の臺長生きたらどうしやう
春の月大きな家に二人きり

一句目、春寒の日に春火鉢に手を焙りつつ、春日のように温厚だった父を懐かしむ。二句目、「一寸の虫にも五分の魂」を地で行く虫の意地に共鳴。三句目、桃の花から察すると女のお孫さんか。作者の満面の笑みが見えてくる。四句目、古来より不老長寿は人間の願いだ。そこを兼好風に「命長ければ辱多し」と言う所に諧謔がある。五句目、一抹の淋しさがあつても悠悠の二人暮し。「春の月」との取合せが秀逸である。

「天の森集」より共鳴句五句。

ひとり居の声高に撒く鬼は外 中尾節子
熱爛や真の怒りは無口なる 矢橋郁子

叩くほど光集まる畦を塗る 上村えつみ
濡れてゐるロープ重たし多喜二の忌 加藤美名
靴換へて広がる歩幅青き踏む 坂中徳子
一句目、独り居の静かな日常。節分ばかりは大きな声で元氣よく。二句目、熱爛を飲んで怒りを押さえているのは作者かご主人か。三句目、畦塗は春一番の田仕事だ。粘つく新しい土を畦に塗ってその上を強く叩きつける。光る畦は野の春だ。

「当月集」より共鳴句四句

忠魂碑に一礼をして初詣 赤塚えつ子
日向ほこ日向を残し皆去りぬ 鈴木みよ子
一人でも何とかなるよ霞草 竹内千賀子
春悠や指に重たきリングして 原田葉子
一句目、神に詣でる前に御国の為に散った郷土兵に先ず一礼。三句目、独り居の開き直り。「霞草」との取合せが秀逸。四句目、結婚指輪の重たさとは何か。想像が尽きない。

「同人集」より共鳴句四句。

家中の障子張替へ三回忌 津矢田豊子
靴脱いで平城京の青き踏む 富田志津子
傾いて回る地球儀日脚伸ぶ 町野眞佐子
畑を打つ遠くに列車眺めつつ 森尾邦子
全体を通して、自己の感性を自分の言葉で詠んだ句が多いと感じた。菜の花会の今後益々の発展を祈念致します。

大村節代 選

鼓
笛
集

太鼓打つ姉弟の競ふ夏祭
鳴るかなとこはごは吹く子草の笛
山の幸集めて里の夏料理

清水桂子

一坪の庭に芍薬凜と咲き
夏向きの帽子の売場足を止め
病窓へお囃し聞こゆ夏祭り

篠崎紀子

端居の子露伴漱石おないどし
「鬼」の字は梅干の皴妻の皴
虹指して受胎を告ぐる金髪医

森下山菜

蓮の葉の水面を蔵す牛ヶ淵
夏芝の広がる空虚大奥址
天守台の名残の松や虎が雨

皆川更穂

源氏名を貰ひて咲けり花菖蒲
あぢさゐの雨に湧き立つ毬の色
真白なる媪の脚絆秋遍路

香田裕誌

鎌倉や白磁彩る夏野菜
軒先を掠む江ノ電薫る風
身構へてサーファーうねり見定むる

岡田宣子

でんでらと黒雲湧いて夕立来る
一斉に動き出す街夕立去る
蝸牛角に行き先問ふ晴れ間

寺町知子

朽ち枯れし事件現場の百合の束
病葉の一枚落ちて空の蒼
七夕や天に矢切の渡し舟

新 曆文

追ひ越さるロードバイクや夏の朝
旱星見沼の流れ静かなり
我儘な貴女の忌日益が来る

飯田忠男

隅つこ田に植ゑて棚田を後にせり
香を封じ朝どり野菜御中元
乙女らは鬼灯市の境内へ

木下闇「熊出没」の大看板

昼餉時うつかり守宮貌を出す

老鷺や奥入瀬ゆきの遊覧船

梅雨晴れ間大きなシートつひらひらと

一匹の蚊羽音かすかに眠れぬ夜

猫と孫団扇ゆうるり右左

思ひ出を紡ぎ紡いで夏の山

山歩きコップ代りの手の平や

借切りで憩ふ金魚の腹太し

波音の高き湖五月闇

五月闇あかあかともる施設の灯

ちやんづけで遊ぶ小川や夏休み

青田風夫十日目に無事退院

華麗なる夕虹夫と仰ぎけり

鳶鳴き江ノ島南風吹き渡る

加藤でん治

樋口元美

畑宮栄子

嶋田洋子

高原和子

関谷多美子

鼓笛集作品評

大村節代

蓮の葉の水面を蔵す牛ヶ淵

皆川更穂

牛ヶ淵は全国に幾つかあるが、他の二句から推測すると、この句は、皇居北の丸公園の堀であろう。桜の頃には花が堀に垂れ、桜が終ると蓮の葉が堀一面に広がる。囲りのビルと蓮の葉の緑の対比が素晴らしく、都心にいることを忘れてしまふ、ほっとする景である。

身構へてサーファーうねり見定むる

岡田宣子

砂浜で、波乗りをしているサーファーを、のんびり見ていると、真に優雅に映る。ところが掲句の「身構へて、波を見定むる」のフレーズにより、サーファーが一心に集中している様が上手く伝わり、良い波が来るようにと…。

七夕や天に矢切の渡し舟

新 暦文

当世、各地の渡し舟が少なくなったが、俳句には登場することがある。しかし、天に矢切の渡しとは誠に壮大で、七夕の夜、織姫も彦星もさぞ、喜んだことであろう。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）

反町 修

小さき苗溺れさうなる植田かな

私の散歩コースは見沼田圃の一面にある。初夏の水田は田植を終えたばかりで水を一杯に湛え、苗はまだ弱々しくあつぷあつぷしているような情景でした。

当初は大歳時記で確認して上五を「若苗」としたが、その後合本歳時記では「若苗」を季語「早苗」の傍題としているのを知り、季重なりと取られるリスクを考えて「小さき苗」に変えました。

訃報

誌友 蛭田 律子様

令和六年七月十四日 御病気の為逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

特集 追悼・鷹羽狩行

特別企画 見る、聴く、触れる秋の風

巻頭作品10句

名和未知男・二ノ宮一雄・田島和生
鈴鹿呂仁・江崎紀和子・佐怒賀正美
石田郷子・清水和代

俳壇

10月号

9月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
小島 健

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅳ期〕…… 朝妻 力・村上喜代子

連載

季節の移ろい／二十四節気…… 遠山陽子
俳人の住む町…… 中山和子・森野 稔
私の本棚・私の一冊…… 津高里永子
旧派の俳句…… 秋尾 敏
知つてるようで知らない俳句用語…… 井上泰至
明日への俳句…… 川合牛蒡

俳句と随想12か月

石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

句集喝采

菅原卓郎

◆高橋邦夫「素心」

角川書店

著者略歴 昭和十九年栃木市生。平成十五年「PC俳句会」入会。同十七年「塔」入会。同二十四年「玉藻」入会。同三十年「暖響」創刊。現代俳句協会会員。

春日部をこよなく愛する著者の第一句集。有季定型のオーソドックスな作風で、極めて好感の持てる句が多い。

古利根の土手に始まる春の色
遠き日の稲架の香りのかくれんぼ
高館や山河しぐるるばかりなり
常の二人にもどり喰積煮返しぬ
命ひとつ生きたる証し蟬の穴

第一句、江口真弓氏の跋文に、著者の根底には、芭蕉・楸邨への憧憬、乾坤の間にある生、滅び去った者への鎮魂等々があるのではないかと述べている。弥生三月、芭蕉が千住を出立し、最初の宿場が春日部だった。古利根の土手の青みに芭蕉への尊敬の念が窺える。第四句、老二人の新年の慌ただしさが過ぎ、ほっとする瞬間を見事に捉えている。

飛び初めて汝も旅人燕の子
柵に寄る春駒の口笑ひをり
語部の声高まり来雪催
青葦の風音を生む丈となる

空蟬のなほも高みへ行く構へ
第一句、弱弱い燕の子と言えども、一丁前の候鳥である。第四句、大震災を語り継ぐ大事さが、切に伝わってくる。

◆柴田多鶴子「桐箱」

角川書店

著者略歴 昭和二十二年三重県生。同六十三年「狩」入会、鷹羽狩行に師事。平成二年「遠矢」創刊。入会。檜紀代に師事。同二十三年俳誌「鳩の子」創刊主宰。俳人協会評議員。

著者は四十歳で俳句を始め、爾来三十余年になり、本句集が第四句集目である。何気ない日常を、鋭い観察眼で捉え、然も非常に分かりやすい言葉で仕上げています。

つつがなく孵り鳩の子親の背に
衰へし日をとこみて秋の薔薇
旧道に人のなりはひ秋簾
貫ひ手のなき猫の子の名を決める
へその緒の桐箱三つあたたかし

第四句、野良猫を著者が名を付け、保護猫としてお飼いになった優しさがにじみ出ている。第五句、句集タイトルの句、桐箱の中身はご自身のお子様の「緒」であろう。

乾物をもどす勤労感謝の日
手ぬぐひのへなへなとあり夜なべ終ふ
春日野の樹下に鹿ある良夜かな
蕪村忌の闇になまめく京の路地
姿よき松より菰を巻きはじむ

第一句、椎茸と干瓢をもどし、ちらし寿司を作る母の姿が垣間見える祝日の良き日である。第二句、夜なべを終え、直ぐにでも寝床に入りたい疲労感がひとと伝わってくる。第五句、この世は万事「見た目」である。

網野月を選

山紫集

老鶯や律儀な文字の道しるべ

池田珪子

老鶯や誘ふ如き風の私語

霜多光代

老鶯や仔牛は耳にタグつけて

本橋稀香

老鶯の声畏まる磨崖仏

菅原卓郎

全山を統ぶる一声夏鶯

——以上特選

乱鶯や倒木山を通せん坊

青木鶴城

老鶯や怒るに足らぬ山の風

秋谷風舎

老鶯のハレルヤ天地澄みわたる

松井由紀子

老鶯に一呼吸置くテーシヨット

新 暦文

武蔵野の名残りを唄ふ老鶯

日高道を

恋しさの募る老鶯峡に啼く

阿部幸代

老鶯の声背に受けとめ轆轤挽く

河野はるみ

老鶯の声が頭上に九十九折

荒井俱子

蒼翠の山野鶯老いを鳴く

池田雅夫

托卵の奴等に負けるな夏鶯

飯田忠男

補聴器の母のにんまり夏うぐひす

石田慶子

夏うぐひす伯父の山荘古びたり

石川理恵

老鷺のこゑ十和田湖に澄みわたる	井上玲子	幽山に老鷺の声頻りなり	小山あつ子
老鷺の山は我がもの鳴き尽す	上戸千津子	老鷺や鎮守の杜の忠魂碑	近藤徹平
夏鷺カンバス立てる藪の傍	内田恵子	老鷺の朝な夕なに峡住ひ	榊原聰子
老鷺や高木を見上げ次を待つ	梅澤輝翠	老鷺や神社の杜へ声の透く	佐々木史女
老鷺の声透きとほる葛折	梅澤佐江	老鷺の声を幽かに畑仕事	笹本啓子
老鷺や仏心目覚め円覚寺	大場順子	老鷺や眼下に湯街背に緑	篠崎紀子
黙黙と歛ふる農夫夏鷺	岡田宣子	老鷺や蔵の街並一望す	篠原さよ子
老鷺や観音堂に訝して	加藤でん治	老鷺やみやげ越後の笹だんご	渋谷さいち
老鷺の声ころがりし朝ぼらけ	川島夕峰	老鷺のこなれた声や森しづか	嶋田洋子
精一杯鳴く老鷺や幸もらふ	熊倉千重子	老鷺も馳走のひとつ山の宿	清水桂子
老鷺のケキヨ美しき峡の朝	小駒さち子	老鷺や話佳境のテラス席	菅原真理
老鷺やいつの間にやら獣道	小林京子	木霊となるや老鷺一声山肌へ	杉浦千祐

老鷺の鳴く牧の朝牛の声	鈴木藻好	老鷺の声谷間から梢から	西幅公子
老鷺や苔むす階の天空へ	鈴木玲子	老鷺や播りぐせつきし播りこぎ棒	野口和子
老鷺や鎌倉の山分け入れば	関谷多美子	老鷺や方言無きを嘆きつつ	野田静香
姥捨や老鷺の声高し	瀬戸雄二郎	流麗な老鷺の声山の朝	野平美紗子
山峡に夏うぐひすが声限り	染谷風子	老鷺や朝の高原風渡る	野村美子
老鷺や湖面に映る榛名富士	反町 修	老鷺やカラオケ店でジャズ唄ふ	畑宮栄子
老鷺よ用心されよゴルフ場	高橋満耶子	老鷺や声がなくなるまで歌ふ	原田秀子
老鷺や音楽室のハーモニ―	武田重子	老鷺やのびのびひとり露天風呂	樋口元美
窓一つ開けて老鷺聴く朝餉	田中章嘉	老鷺やごくりと動く喉仏	檜鼻ことは
老鷺や耳福なる語に出合ひたり	寺内洋子	老鷺を先達として湯ノ湖まで	福田千春
老鷺も村を選びて鳴きにけり	飛永 鼓	暮れ残る里の老鷺声暖るる	保坂翔太
過疎の村老鷺居場所探すかな	南條きわゑ	老鷺や森を出かかる親子連	曲淵徹雄

光悦寺なれば老鶯あらぬ世に

正木萬蝶

老鶯や窓開け放すログキャビン

山中いちい

老鶯や弾痕深き京旅籠

松宮保人

老鶯や沢水を汲む順を待つ

横山君夫

老鶯の導くままに鎮守社へ

丸屋詠子

老鶯や湿原に風呼び寄する

横山礼子

夏うぐひすここに夢二の「黒船屋」

丸山マスマ

老鶯や山と海との間の宿

吉川拓真

開け放つ山小屋の窓夏鶯

宮崎チアキ

老鶯や妻なき家にひとりとは

持永喜夫

老鶯やボーイソプラノ良くとほる

森 和子

宿坊の朝の勤行夏鶯

森川義子

☆

☆

老鶯や元氣仲間と山路行く

森下美智枝

老鶯やぼこんと落つる牛の糞

森美枝子

老鶯の一声に耳そばだてり

山岸久美子

つり橋に老鶯の声秘湯の湯

山下ユリ子

山紫集作品評

網野月を

乱鷺や倒木山を通せん坊

青木鶴城

「乱鷺」は方々で鳴き立てる山の夏うぐいすをいうのである。そうした鷺の声を聞きながら登山していると、中七座五のように遮るものがある。大嵐の直後の様であろうか。そこかしこに倒木が認められ、「通せん坊」をしているのである。「通せん坊」の言い方は、将に登山者の心持ちを素直に表現している。多分、それでも躲して、回り道して頂きを目指すのである。「乱鷺」が応援してくれているようである。

老鷺のハレルヤ天地澄みわたる

松井由紀子

「ハレルヤ」は老鷺の声がそう聞こえて来る、と解釈した。その「ハレルヤ」に拠って、「天地」が「澄みわたる」ことになった。固有の空間を、固定された空間を呈示していない分だけ、スケールの大きな句になっている。「澄み」は秋季の季感があるのだが、「ハレルヤ」を主語とする使役的な表現と筆者は受け取った。

武蔵野の名残りを唄ふ老鷺

日高道を

春、里に下りて来ていた鷺はやがて丘陵や里山、そして山岳地帯へと居場所を替えてゆく。今では関東の平野部にはなかなか見られなくなった武蔵野の面影を丘陵地帯や里山などに見出して、その空間に老鷺の声が重複している。そうした空間にはまだ武蔵野の名残りが在るのである。「名残り」の語彙の選択が句の拠所を担保している。

老鷺の声背に受けとめ轆轤挽く

河野はるみ

中七の「声」の後に切れを感じて筆者は読んだ。句跨りの句作ということである。「轆轤挽く」ということは、漆器の木地を鑿で挽いているということなのである。木屑だらけになった職工がふと老鷺の声に気がつく瞬間、一抹の安らぎと涼しさを感じている景である。

蒼翠の山野鷺老いを鳴く

池田雅夫

芭蕉の句の「鷺や竹の子藪に老いを鳴く」を惹起させる作句である。老鷺を鳴かせるころ、空間としていろいろなところを想定するのが作句の工夫というもので、作者の思いも

そこに表現できるというものである。芭蕉の「竹の子敷」も良いが、「蒼翠の山野」は何とも壮大で清い。作者ご自身を鷺に投影しているのかも知れない。

補聴器の母のにんまり夏うぐひす 石田慶子

お母様がやつとのごとで鷺を聞くことが出来た、と解釈した。中七の「にんまり」に嬉しさと今までの我慢と聞けるようになったその他の経緯が含まれていて、様々な心持を複合的に表現している「にんまり」であろうと思われる。その証が「夏うぐひす」の声であったのは、偶然とは言え好事である。

老鷺や律儀な文字の道しるべ 池田珪子

中七の「律儀な文字」がポイントであろう。実景であろうが、作者がこの文字に着目したことで一句になった。活字体の道標ではなく、人の手に拠る文字なのである。山を愛し、登山者の安寧を祈る心の籠った文字に作者は感銘を覚えていく。兼題句であるのだが、あとから季語を斡旋したような作りになっている。

老鷺や誘ふ如き風の私語 霜多光代

座五の「風の私語」がいかにも詩語である。「風の」も「私語」も詩語にはならないだろうが、「風の私語」としたところに「風」の擬人化が図られていて、囁き合い語り合う「風」の様態が想像される。そこから中七の直喩表現の効果を引き

出しているであろう。

老鷺や仔牛は耳にタグつけて 本橋希香

「老鷺」は聴覚に認識して用いられることが多いであろう。それだけに今回の兼題句はどのような場所（空間）で「老鷺」を聞いているのか、という作句が多かった。掲句は作者が「老鷺」を聞いている空間の呈示にのみ句意を固定することなく、そこで見ている景を呈示して、句意の幅を広げていて、また視覚というもう一つの感覚も取り入れることに成功している。

老鷺の声畏まる磨崖仏 菅原卓郎

「畏まる」の主語は何であろうか。迷うところである。五段活用もしくは四段活用の動詞は終止形も連体形も同型であって、意味的にもしくはリズム的に判断できる作句もあるのだが、難しい場合もある。可能性とすれば「声」か「磨崖仏」であって、人物に近いものとして「磨崖仏」が有力であろうが、一方で仏が「畏まる」のも異様であって、仏の前に「老鷺」が萎縮したとも考えられないこともない。「磨崖仏」が主語ならば、中七の「声」で一旦切れを作り出している句跨りの句と考えられる。「磨崖仏」よりも「老鷺の声」がより勝っていることになる訳で、諧謔が効いていることであろう。

水明夏行

第一日（七月二十九日）

石井喜恵

今年一番という猛暑の中、恒例の夏行の初日を迎えた。出席者は三十二名。席題は「冷奴」詠込は「切」に決定。三句出句までの一時間、心地良い緊張感に包まれた。

主宰詠

冷豆腐食うてひと言「おいしおす」

冷奴離れ座敷が気にかかる

切妻や羅を脱ぐ御寮さん

主宰選

因鯉口を切らば義兼夏芝居

なすきうり半切画紙の殴り書

晚酌や一番星と冷奴

半切の武蔵の掛絵夏座敷

冷奴湧き水に浮く峠茶屋

月を

〃

〃

マスミ

〃

沼の木を真ふたつに切るはたたた神

月山の水が自慢の冷奴

冷奴いつもの席の安酒場

山青葉サイレン鳴り渡る切羽

團扇持つをとこの背へ切り火かな

青竹の切り口涼し嵯峨の宿

切々と語る卒寿の終戦日

晩夏かな石工切り出す石の相

糸切歯使へぬ娘古浴衣

一切を忘るるとき揚火花

冷奴店の親爺の水自慢

卓袱台に昭和の余韻冷奴

酢飯切る団扇遣ひも嫁修行

未使用の青春切符夏終る

半世紀律儀に切りて冷奴

ソウダ水縁切り寺の先の茶屋

封切りの切符を二枚藍浴衣

水切りの石の行方や糸蜻蛉

指切りや部活帰りの夕焼空

半丁を妻と分け合ふ冷奴

雷親父ご機嫌取りの冷奴

冷奴酔へば抑留話など

土用東風鎌倉釈迦堂切通し

冷奴倅と飲めど話題なく

公子

〃

鶴城

徹平

卓郎

京子

久美子

かつ子

翔太

はるみ

道を

昇

稀香

更穂

和葉

楽

風子

喜恵

〃

以上特選

翔太

はるみ

かつ子

道を

章嘉

アルプスの水掛け流し冷奴

熱帯夜飛切りの報舞ひ上がる

单身赴任薬味の要らぬ冷奴

花道で切つた張つたと夏芝居

亡き夫へ切つて供へる青林檎

冷奴杉著添へし山の宿

山の神に一品所望冷奴

切つて出すだけの手料理冷奴

月命日切りて供ふる百日紅

冷奴のごごしわかる歳になり

炎暑ゆゑ妻もぐうたら冷奴

暗転の女腹切り夏芝居

益子の皿に浮島然と冷奴

健啖の彼には合はぬ冷奴

秋出水切羽つまりて車中かな

大切り西瓜まよとこ女かぶりつく

妻の愚痴聞こえぬふりや冷奴

晩酌の父の最後や冷奴

絵日傘や笑む口元に糸切歯

怪盗もロケが終れば冷奴

飽食は難し純白冷奴

白肌に踊る枯れ節冷奴

青春の恋慕断ち切る心太

夏場所や切り込む速さ勝敗に

冷奴角きつちりと皿に盛る

昇

美智枝

節代

美紗子

啓子

徹雄

延昭

修

輝翠

稀香

風子

マスミ

和葉

千祐

千祐

宣子

久美子

鶴城

徹平

更穂

卓郎

京子

公子

喜恵

互選による高得点順位

- 一位 石井喜恵
- 二位 山岸久美子
- 三位 石山かつ子
- 四位 菅原卓郎
- 五位 皆川更穂
- 六位 小林京子
- 七位 網野月を
- 八位 五明 昇

第二日 (七月三十日)

染谷風子

連日の猛暑の中、夏行二日目が二十九名の参加を以て開催された。席題は「青山椒」と「次」の詠込み。

主宰詠

青山椒を添ふる女将の心ばへ
弥次喜多に徹する我ら暑氣払
鄙には稀と言はれて五年青山椒

主宰選

次の間の気になる声ぞ夏の月 輝 翠
 家中に朝採りの香や青山椒 〃
 五平餅に信濃香らす青山椒 昇
 青山椒マリア地蔵へ続く道 〃
 淀みなき忠次の科白夏の始 道 〃
 極めつけ江戸の老舗の青山椒 〃
 技と香の錦市場の青山椒 美 子

壁面を次々のぼり蔦青し
大夕立六十九次浦和宿 月を 美子

肝焼の鉄砲串やあをざんせう 〃
小悴のほざく正論青山椒 卓郎

塗り膳に席次の札や夏座敷 〃
飛ばし読む五十三次冷素麵 喜恵

特攻隊の自画像若し青山椒 節代
友達以上恋人未満青山椒 かつ子

次の角曲がれば蔵の片かげり 京子
青山椒乗せて若狭の海の幸 マスミ

黒雲の走る速さや青山椒 和葉
青山椒思ひ起こせし家庭訓 鶴城

はんなりと呑む女や青山椒 稀香
青山椒裏木戸に入る人の声 徹雄

尼僧庵裏戸ひつそり青山椒 啓子
まばたきもをしむや花火次々と 久美子

蒲焼は老舗の「松」よ青山椒 風子
——以上特選

次送り旧家の嫁の盆支度 輝 翠
青山椒胸まで埋もる野の仏 喜恵

青山椒作務余念なき修行僧 昇
石切りの溪を向うに青山椒 延昭

青山椒主役を立つる役どころ 道 〃
青年の一途な気骨青山椒 更穂

奥飛驒の高原育ち青山椒 美子

パリ五輪次々メダル夏の夜 美智枝
極暑避け次の火ようにランチ会 桂子

青山椒小江戸の空に鬼瓦 節代
青山椒水神の幣ゆれどほし かつ子

長男も次男も着しや白緋 京子
式次第の墨痕淋漓山開き マスミ

奥宮に二礼二拍手青山椒 卓郎
次男坊は外科医向きなり青蜥蜴 和葉

長男に負けぬ氣質や青山椒 章嘉
なないろの赤白黄色あをざんせう 月を

夏安居連立一次方程式 鶴城
ソーダ水二次関数をびしよ濡れに 稀香

黄味しぐれ青山椒の一葉かな チアキ
次々と夢を呼びこむ滝の音 徹雄

山歩き青山椒にとびつきぬ 公子
青山椒佃煮にする夫一周忌 美紗子

青山椒少し勝気な三姉妹 啓子
青山椒小鉢に添へし一献を 宣子

炎昼や次の言の葉喉の奥 楽
次世代に残したきもの夏樹林 久美子

次の間に芸子を揃へ暑氣払 風子
第二日目の互選による高得点は次のとおり。

一位 染谷風子 二位 菅原卓郎
三位 梅澤輝翠 四位 石井喜恵
五位 境 延昭 六位 皆川更穂
七位 大村節代 八位 五明 昇

第三日（七月三十一日）

皆川更穂

猛暑の中、三十名が出席して開催された。席題は「汗拭ひ」と「辺」の詠み込み。

講評の際に主宰より、「三日間の夏行による短時間での作句訓練が参加者の財産になる」との期待が示された。

主宰詠

ブティックや思ひの丈をハンカチに
甚平や字引見て書く「辺」の旧字
ハンカチ握り手柄話を留処もなく

主宰選

楽章の間の指揮者ハンカチーフ 徹平
無法松を気取り鉢巻き汗拭ひ 〃
夏帽子海辺の風をなつかしむ 京子
クレーンの天辺にある晩夏光 〃
漫ろ歩きの川辺の音も秋近し かつ子
行宮の四辺を鎮め鳥賊釣火 昇
弁解のアイテムとなる汗拭ひ 延昭
馬冷す岸辺に寄する波静か 稀香
汽車の窓むかしも今も白ハンカチ 道を
秘めごとやハンカチにある頭文字 輝翠
囚不牧辺り烟りも美しき夏の雨 喜恵

鋼打つ鍛冶の真白の汗拭ひ マスミ
ハンカチと団子虫出る子のポツケ 啓子
ハンカチの黄ばみに浮かぶ来し方よ徹雄
項の汗すうつと拭ふ淑女かな 宣子
花文字の刺繡小さく汗拭ひ 風子
白百合を一輪添へて野辺送り 更穂
——以上特選——
爪痕を辺土に残し夏終る 是るみ
玉虫の襲の色や沢辺りに 茂子
噴水の天辺の水無重力 修
方墳の天辺の黙や夏ひでり 卓郎
汗拭ひ首に草取りはじめけり 美紗子
二等辺開襟シャツの襟二つ 楽
いつよりか辺野古語らず夏終る 鶴城
両面を使ふも足りぬ汗拭ひ チアキ
涼風や山の辺の道さあ行こう 美智枝
パリ五輪観覧席のハンカチーフ 久美子
夏菊や旧帝国の四邊石 月を
辺城へ続く木の橋雲の峰 節代
磯辺打つ花火のごとく夏怒涛 公子
開け放つ浜辺の窓や夏館 啓子
友の家は確かこの辺紅蜀葵 和葉
千年の熊野中辺路蟬時雨 マスミ
山の辺の窓にけむりや夏深し 延昭
明易し枕辺に置く捕物帖 徹雄
道の辺の子育地歳夕焼中 風子

鮑屠大工の腰に汗拭ひ かつ子
天守閣四辺涼しく見渡せり 稀香
堆く塩炊く男の汗拭ひ 輝翠
汗拭ひつんと上向く鼻の先 喜恵
極暑中轟音の中辺野古の子 道を
膝に置くハンカチーフにある季節 京子
野辺を行く葬列の銅鑼土用風 徹平
洗ひ髪窓辺に語る姉いもと 昇
人影に寄する池辺の錦鯉 宣子
津波来し磯辺尋ぬる姫蟹 更穂

第三日の高得点者は左記の通りであった。
一位 皆川更穂 二位 丸山マスミ
三位 石山かつ子 四位 星野和葉
五位 笹本啓子 六位 五明 昇
七位 染谷風子 八位 梅澤輝翠
三日間を通しての成績
(天) 網野月を
(地) 菅原卓郎
(人) 石井喜恵

超特選五名(小林京子、本橋稀香、五明昇、近藤徹平、皆川更穂)には主宰句の色紙、特選七名(山岸久美子、石山かつ子、日高道を、染谷風子、青木鶴城、梅澤輝翠、岡田宣子)には主宰句の短冊が授与された。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

風鈴売りの声ゆつたりと川向う
貝風鈴大皿に盛る島の幸
声色と音で客寄せ風鈴売
喜望峰越ゆるを夢見三尺寝
南部風鈴舌がちぎれてそれつきり
ひとつ鳴りあとは次々駅風鈴
海霧深し宗谷岬の望郷碑

卓郎 稀香 京子 はるみ 延昭 順子 徹平

——以上特選

本郷の老舗の喫茶風鈴吊る
風鈴屋風が人呼ぶ佃島
志望校伸るか反るかの夏合宿
写真紙を被り大の字江戸風鈴
遠望す雪溪清し岩手山
風鈴の明るき風のソプラノよ
海恋うてからからと鳴る貝風鈴

節代 延昭 京子 徹平 千祐 拓真 順子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

風鈴揺れ「やあ」と入り来る馴染客
坂下る風鈴売りのやかましく
思ひ出の音に酔ひたる南部風鈴
次の風待つ風鈴に江戸情緒
激しき風鈴の音もこの世かな
大の字に寝て待つ大望竹婦人
風鈴の舌もつるるや不整脈

マスミ はるみ 和葉 稀香 チアキ 卓郎 和子

——以上特選
掌に小さき蝶でんの櫛の梅雨湿り
蠅打つや殺人犯に殺意なき
来るぞ来るきーんと眩く氷水
打ち来てはぶつぶつ帰り土用波
笹の葉に幼き夢を結びけり
湯気のたつ一椀ありて夏料理
仲見世の裏手杏のかき氷
かき氷サクサク別れの所以など

竺仙 〃 〃 〃 サカエ 〃 〃 みどり 〃

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 報

築三百年曲がり梁哉かき氷
仄かな香茅の輪くぐりの足みつめ
――以上特選
鱧穴子鰻決まらぬ土用かな
かき氷止まぬ会話に溶けてをり
江の島の岩場にくだけ土用波
崩れゆく美をすすりけりかき氷
身を削り生まれ変はりてかき氷
三度鳴き梅雨明け告ぐる鳥哉
子が問ひぬ「うなぎ」てなあと土用入る竺仙
胸を打ち砕け散りぬる土用波
かき氷こめかみ押さへ紅い爪
かちわりや正座して聴く玉音盤

士史 りこ 妙子 敏江 サカエ 峰雄 士史 鶴城 昇報 康世 雅夫



万緑や縄文杉も躍動し
合鍵で通ふをとこや梅雨の闇
万緑の吐いて吸ひたる鳥の数
弁天の乳首に注す朱日雷
川風や盛切で酌む冷し酒

順子
萬蝶
徹雄
昇

万緑の満つ哺乳瓶もみぢの手
七月の山嶺に浮く雲の笠
万緑やはや転動も四年目か
木下闇気配もせずに猫のをり
梅雨満月狼男が逢ひに来る
万緑へ飛び出しさうな狛兎
夏の朝色の目覚むる畑物
万緑深く法燈守る大御堂

千祐
雅夫
星歩
萬世
萬蝶
順子
徹雄
昇

第四例会 (浦和)

石井喜恵
反町修報

白南風に白さ際立つ姫路城
この路地に生まれ育ちて夏祭
白南風やゆるき起伏の古墳群
白南風やボトルシツプの走り出す
長刀鉦の稚児の毗祭鉦
荒神輿恋をつかんだ奴がある
殿は俺に任せろ祭足袋

寛治
〃
恵子
昇
マスマ
延昭
喜恵

白南風や葉山の海のカフエテラス

——以上特選
翔太

——以上特選

第五例会 (浦和)

梅澤佐江
河野はるみ

羅を写す反り身の大鏡
羅をぬける風あり谷中墓地
雪溪の始めの雫せせらぎに
雪溪を過る影あり雲ひとつ
羅を着て艶やかな裾さばき
雪溪ゆくわれ透明となる心地
羅や流るるやうな綾まとふ

羅をぬける風あり谷中墓地
雪溪の始めの雫せせらぎに
雪溪を過る影あり雲ひとつ
羅を着て艶やかな裾さばき
雪溪ゆくわれ透明となる心地
羅や流るるやうな綾まとふ

紹を召して身じろぎもせず砂被り
大雪溪を行く人影の黒点よ

——以上特選
知子
宣子

夏祭若衆に似合ふ緋のたすき
白南風や光となりて少女駈く
笛太鼓法被を着れば祭の子
白南風や吹き飛ばしたる小さき意地
招く笛招く舞の手祭笠
旅先の夜は祭の顔に成り
白南風や降水帯の予報カー
辻上の御神酒をつたひ夏祭
郡上をどり大地をたたく祭下駄
餓鬼大将今や祭の笛の長
白南風や海を見渡すレストラン
白南風や漁師の顔に深き皺
祭半纏洗ひ晒しの三代目

由紀子
恵子
修
行雄
マスマ
曆文
でん治
延昭
玲子
昇
寛治
光恵
喜恵

若松例会 (京橋)

正木萬蝶
石田慶子

羅をゆるやかに着て能楽堂
羅や衾宜の袴の濃むらさき
那須連山雪溪遠く懐かしく
薄衣や母の形見の紋違ひ
雪溪の裾紺碧の山上湖
宮司の祝詞風に千切るる山開
風神雷神なだめすかして山開
山開き新調リユツク床の間に
御戸開妻は山岳救助隊
一札に神の宿るや山開き
機関車の勇姿迎ふる山開き
一步先づ神に捧げん山開き

玲子
義子
千祐
はるみ
佐江
千春
はるみ
京子
鶴城
詠子
萬蝶
——以上特選
慶子
星歩
マスマ
稀香
千春
千祐
京子
鶴城
詠子
佐江

たれそれに似たる背中や山開き
野鳥一番銜三番山開き
酒を抜き髭剃る朝山開き

ひろこ
はるみ
萬蝶

関西例会（大阪） 森本早苗報

波あらし越の千枚青田風
ほほ笑みに言葉はいらぬ梅雨晴間
合鴨を放ちて青田さざめかす
花火果て痛みだしたる鼻緒擦れ
娘四人揃ひ浴衣の晴着めく
朝練は何時も五時起き青田風
かな女句碑にみまゆ別所の梅雨晴間
絶滅危惧種青田に二羽の紅き脚

玲子
千津子
和子
道子
洋子
人美
早苗

天領の水豊かなり青田波
廃屋に松葉牡丹の生き生きと
青田風切る自転車の吾の若し
夏蝶のひと休みする高架橋
大青田継ぐと決めたる仁王立ち
海桐咲き海のにほひの近づけり
暮参終へ吹かれて帰る青田道
夏の空起重機まじに鶴の首
天地の恵み吸ひ上げ青田波
百寿迄歩くと誓ふ青田道
朝始まる肺一杯の青田風
師の句碑に拾ふ松かさ梅雨晴間

以上特選
玲子
千津子
洋子
人美
和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
嶋田洋子
早苗

昔話あれこれ 41

和歌の名手 大納言公任 三船の誉れ

頼忠卿の子息の公任は、小野宮実頼公の孫だからであろうか。和歌の道に優れていた。人柄も立派で奥ゆかしい方だと評判であった。

ある年（長保3年・1001）、道長公（この時道長は既に左大臣）が大堰川で舟遊びをした時、作文（漢詩）の船、管弦の船、和歌の船と三船に分けてそれぞれ船に優れている人を乗せたが、道長公は「大納言公任公ほどの船にお乗りになるだろう。」と尋ねたところ、「和歌の船に乗りましょう」とのことだった。そして次の歌を詠んだ。

をぐら山風の風の寒ければ
紅葉の錦着ぬ人ぞ無き

（大意）小倉山と嵐山から吹きおろす風が寒いので、紅葉の葉が人々の着物に散りかかり、誰もみな錦の衣を着ているように見えることだ）

自ら願ひ出られただけのことはあつて、見事に詠まれたものですな。

そして、「この歌ほどのいい漢詩を作ったならば、名声ももつと上がったろうに、残念なことをしたよ。それにしても、道長公が『どの船に乗ろうと思うか』とおっしゃられたのには、我ながら得意になったよ。」と言ったということだ。

一事だけでも人に優れているという事は、大した事なのに、どの道でも人より傑出していたことは昔にも例のない事だ。

頼忠公は永祚元年（989）薨去。
「廉義公」と申し上げる。

左大臣師尹

師尹公は忠平公の五男である。

「小一条の大臣」と言われた。

右大臣で三年。右大臣から左大臣に遷ったのは、左大臣の源高明公が大宰の権師に左遷された（安和二年・969）からである。この安和の変は師尹公らの讒言によると噂された。

そのため、高明公の恨みを受けてその年の内に亡くなったという噂であった。

*大鏡は紀伝体（人物中心の歴史記述）をとっているので、時代は前後する。

（つづく）

各地
句会



ミモザの会 (横浜)

旧姓は「蓮沼」私の蓮の花開く
蓮の花ボムといふ音聞いたよな
下戸なれど酒呷りたし宵祭
神神し背伸びして見る古代蓮
大原の声明朗と蓮白し
雲流るまだらに映り蓮の池
気が付けば厨の戸棚蟻の列
蓮池や上野は故郷をつなぐ駅

櫻蔭句会 (浦和)

大仏の耳朶ゆたか夏の子ら
耳元で何かささやく青葉風
枇杷たわわ戦ひ止まぬ人の世の
木耳の蝕感味はふ夕餉かな
老鷲の間合ほどよく耳にくる
耳遠き夫の通訳梅雨に入る

史代 栄子 詠子 玲子 萬蝶 亜弥子 千春
公子 真理 久美子 千恵 茂子 美智枝

万緑の参道伯父の耳鼻科医院
搾乳の牛しづかなり枇杷熟る
何を聴く貝殻耳に夏の果て
里山の枇杷の実たわわ朝日受く
筆談の末に指さす庭の枇杷

山茶花 (浦和)

山 茶 花 (浦和)
帰り道子供さわがし四十雀
素人芝居にやんややんの夏の宵
柿の木塾 (浦和)

ひまはり畑遊んでゐるか遊ぼうよ
暑氣中り喉の奥まで疲れ果て
こんなにも風に重さが暑氣中り
向日葵畑迷路に遊ぶ兄いもと
暑氣中りせぬために酌む鬼殺し
動物園の河馬の歯みがき暑さ負け
足裏も冷してあげる暑氣中り
ひまはりの迷路に思ひ当る角

芽吹句会 (浦和)

かな文字の流れ涼しや書道展
掛軸の草書の虜夏座敷
七夕やへいわをいのる幼な文字
たわわなる枇杷の実見れば金の鈴
書物より離す眼に夏木立

多美子 由紀子 行雄 美子 幸代
美江子 マスミ 恵子 節代 和葉 光子 昇 章嘉 和子 千重子 修 富子 久美子 チアキ

緋袴が境内闊歩七夕祭
湯上りの刀自へ揺れそむ七夕竹
七夕や楷書で祈ぎ事したためて
枇杷熟るる旧街道の分かれ道
りんどう俳句会 (浦和)

大皿と卓の年輪夏料理
ころ合ひの羹うれし夏料理
今も耳に残るあの声百日紅
百日紅子供知恵の限りなし
冷素麺水は秩父の武甲山
山を下り五体のゆるぶ夏料理
百日紅百日祝ひに咲き初むる
水枕しても地獄ぞ熱帯夜
水差の結露もどかし夏ひでり
きざきサークル (浦和)

打水や石堀小路に下駄の音
白南風や赤子まるまる洗ひけり
白南風や機嫌よろしき膝小僧
打水を躲す少年けんけんぱ
白南風にすつくと立ちし岬馬
白南風に峠の先はいろは坂
白南風に我が身を散らすさがり花
白南風や生花教へ半世紀
白南風の島にほんのり醬の香

弘子 ひろこ 玲子 道子
寛治 君夫 順太 翔峰 夕雄 徹雄 まりこ 卓郎
光子 俱子 健司 啓子 和枝
和子

水明鬼石句会 (鬼石)

雨やみて雲つきぬける花火かな
初鳴きの蟬一声で去りにけり
竹林の夏うぐひすの声しきり

聰子
和子
ナオ子

りそな俳句会 (浦和)

目を細め駿馬前掻き夏の空
被災地の子らにも同じ夏の空
夏空や航跡白き観光船
夏空に君が輝く地区予選

建治郎
道を
寛治
勲

キャンプ場静寂に残るカレーの香
せせらぎを子守唄としキャンプの夜
テント張る初体験の児らを連れ

久美子
マスマ
雅夫

蘭の会 (浦和)

若竹や己の道をどこまでも
若竹の光の中で坐禅組む
若竹の夜風に戯るる葉音かな
短夜や言の葉つむぐ雨の音
若竹や雨をもてくる雲白し
短夜や語り尽せぬまま明けぬ
白鳴琴夢へいざなふ午睡かな
枕辺に新約聖書短き夜
祝酒に酔ひて一睡明易し
いづこにて松蟬鳴くや草枕

夕峰
まりこ
さよ子
風舎
寿夫
和子
伸子
小麦
風子
瑠子

鳴禽や剥製かざる作り滝
鳴き竜の音の乾きや梅雨晴間
短夜や世の永ければ憂ひあり
雛の会 (浦和)

月を
鶴城
京子

飛行機を掴みさうなる雲の峰
パン食を嫌ふ一徹雲の峰
県境をひとまたぎする雲の峰
雲の峰飲み干す牧の乳の濃き
雲の峰弁当すき間なく詰めて
ばんばんと入道雲へシート干す

輝翠
喜恵
チアキ
公子
燈女
佐江

和歌山水明句会 (和歌山)

涼しさは水かけろふの飛雲閣
大空へ競ひて伸びる今年竹
隧道抜け眼にやさし青田かな
青田風位牌忘れてUターン
病葉や風のくれたる着地点
おはやうと犬に手を振る梅雨晴間
風鈴と風のハーモニ―高野駅
黒揚羽かな女の句碑にたどり着く
青葉の会 (浦和)

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
廸代

蜘蛛の巣の蜘蛛の逃げゆく夕立かな
空も街も洗ひたてなる夕立あと
字余りに悩む俳句や夏の月

浴衣干す風のせつなき恋路かな
照れもせず選る花柄の旅浴衣
初浴衣あさがほ柄の定番を
鶴川山百合句会 (町田)
梅雨晴れや女性候補の白い服
梅雨入や貰ふカエルのぬびぐるみ
父あらば冷酒こよなく胸に沁む
三叉路に三角の家梅雨晴間
梅雨空へ飛び出してゆく次男なり
梳けば跳ね髪癖強し梅雨の朝
梅雨じめり掟破りの異国人
フレブルと梅雨の晴間を遠まはり
「めめ」といふ絵馬の並びて梅雨晴間

智恵子
人美
洋子
雄二郎
月を
史代
広子
由美子
千春
萬蝶
うさぎ
玲子

櫻の会 (浦和)

大暑なり血管太く浮き上がる
着流しの夜店立ち寄り地酒酌む
準備終へ夜店の裏の握り飯
掬ふたび少年になる夜店かな
大暑なり小便小僧偉さうに
あつさり系のレシビあれこれ大暑の日

若狭水明会 (若狭)

石あれば石に腰掛け風薫る
ほろ酔ひを夜風が誘ふ螢狩
螢火や愛する人の突然死
螢狩ひそひそ話闇に浮く
螢狩つなく兄の手たくましく
螢狩子らの寝息に消す灯り

父の背におんぶをせがむ螢狩
眼福の紫陽花寺やそぞろ行く
奥山の炭焼き跡や額紫陽花
あぢさゝみや迎へる女将雨の庭
紫陽花や刺身分厚き浜の宿

阜月の会 (浦和)

香水に乱れ乱れてはや八十路
虎が雨曾我の五郎の乱れ髪
梅雨寒や乱雲妖しく漂へり

朋子 裕誌 富子 文子 あつ子 千重子

白鷺 寛久 郁子 初花 友夏

祥子 笑風 八重子 保人 和風

山菜 更穂 光代

一時間待ちて土用の鰻かな
寄り添うて炎昼の道蔭えらび
乱れ飛ぶ雲の行方や夏怒濤
背開きの土用鰻や江戸の粋
遮断機を越えて鰻を焼く煙
乱筆の孫を叱つて豆御飯

野ばらの会 (浦和)

汕頭のハンカチそそと忍ばせて
山麓の風にダリアの咲き揃ふ
満開のダリアを残し家主逝く
大輪のダリア明日咲く鼓動あり
里の道安全祈願ダリア立つ

たかな俳句会 (川口)

ヤングマン日傘を開く土用かな
立ちこぎで友の背を追ふ夏の果
みつめられおむろに咲く女王花
女王花咲かせ定年なき家業
ひと品を加へもてなし土用膳
土用入日本列島燃え盛る

珊瑚の会 (浦和)

下校子のまづは素足になる習ひ
父の胡座にすぼつとはまる素足の子
よちよちの素足白砂まみれる

珪子 紀子 静香 曆文 美佐尾 さいち

秀子 栄子 夏江 茂子 みき子

謙一 のり子 小麦 小義 鶴城 静香

広子 和子 和葉

逆立ちの素足の指を壁に置く
手に掬ふ水の濁りやあめんぼう
食堂の若き素足や山の風
湯めぐりや素足に馴染む宿の下駄
少年の竹踏み素足嬉嬉として
あめんぼう水切石と競ひけり
少しいぢけし能登の川原の水馬
川に浮く雲に取り付くあめんぼう

神戸大池句会 (神戸)

裏山の声湿りがち夏嵐
西日燦高層ビルの窓ガラス
紫陽花はブルーがよけれ六甲の山

蝌蚪の会 (浦和)

オカリナの歌口に罅晚夏光
孟蘭盆や経読む所作の修行僧
螢火に思はずハモる小声かな
はちはちの梅ぶくぶくと晚夏光
夏深し恋の成就の絵馬揺るる
東経の果てまで行かむ夏休み
夏深し雲湧く嶺の空広し

歓声に螢ますます光りけり
夏魚板場に三十路経た包丁
彷徨へる博徒くづれや晚夏光
螢火や歩きスマホの金次郎
曼荼羅の經典ゆかし半夏雨

かつ子 喜恵 マスミ 光子 恵子 史代 節代

千津子 玲子 早苗

夏野 ひさの 風舎 幸子 秀子 礼子 さち子 元美 しろく

月城 鶴城 宣子

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

パリ祭や銀巴里ありし七丁目

校庭の太鼓の響き雲の峰

巴里祭や顎に堪へる硬きパン

巴里祭紳士の胸の緋のチーフ

借景の富士は茜に夏館

昼寝覚するりと逃げし詩の欠片

トラツクの窓に足裏三尺寝

優駿の駆くる大地や雲の峰

俳句の手ほどき (岩槻)

山伏主従偲ぶ安宅の閑涼し

太棹に果てぬじよんがら夜半の夏

宅配夫いつも小走り夕薄暑

宅配の置荷を覗く向日葵よ

「社宅の子」と言はれし街や水鉄砲

よみがへる昭和歌謡よ夜半の夏

ぼちぼちと仮設住宅能登の夏

木星の衛星四つ夏の夜に

夏の夜の書架に「怪談」息ひそめ

夏の宵一羽もどらぬ伝書鳩

印要らぬ宅急便や梅雨明くる

四方から漫ろ歩き夏の宵

宅配の芳香はなつメロンかな

鬼気迫る琵琶の語りや夏の夜

延昭

洋子

早都子

由美子

美枝子

俱子

健司

昇

佐江

徹平

義子

忠男

翔太

美子

桂子

久美子

幸代

卓郎

チアキ

知子

延昭

かつ子

円卓の会 (浦和)

溪流を風に逆らひ黒揚羽

産声の待てど聞こえず夏の星

この国に女王は多し山女釣

溪流に同化をしたる岩魚釣

万緑の甲斐の山々見回せり

若き母乳ふくませし合歡の花

妻は吾の吾は妻の手を大暑かな

人間の安倍川餅や油照り

新樹の会 (浦和)

盆祭むかし団子を盗るならひ

サングラスして振り鉢巻団子焼く

学らんの応援団や夏旺ん

泳げどもよるべなき身の天使魚

選手団セーヌへ向けて夏の雲

口角に泡の空疎や熱帯魚

水明熊谷句会 (熊谷)

神主の祝詞朗朗山開き

前向きに生きて冷酒のひとり酒

生臭き夜風の闇に守宮の目

鉄格子の窓に守宮や射す朝日

冷酒を試す厨のをんな衆

京子

静香

拓真

翔太

輝翠

道を

月を

鶴城

道を

風子

清吉

徹雄

修

鶴城

道

燈女

栄子

徹平

卓郎

角打ちの印半天冷し酒

クライマー凌ぐ守宮の名演技

冷酒好き負けず嫌ひの妹がゐて

若楠句会 (浦和)

町会の名人浴衣や堂に立つ

雷門外つ国美女の浴衣かな

人の波くぐりてゆけり藍浴衣

天道虫ぶいと飛び行く西は吉

星の数欲しがるシエフやてんとむし

御下がりを嬉嬉と着る子よ初浴衣

酷暑の五千歩健康組に入れておく

若鮎句会 (浦和)

雑草の意気揚揚と日の盛

日盛やレトロ喫茶の薄明かり

日の盛室外機のみ気配あり

赤鳥居ひらりとぬくる夏燕

絵葉書はマッターホルン夏燕

下校子の塩吹く帽子日の盛り

夏燕午後のけだるさつきぬける

夜明けなる石庭迫る蟬の声

あをすぢのサッシュを背に夏燕

忙しきに訳などなくて夏燕

日盛りの日陰にピクリ虫揺れる

風子

秀子

茂子

風舎

真由美

直子

葉子

鶴城

京子

宏治

貴

ひとみ

芳春

香音子

秀子

稀香

真

道郎

月を

鶴城

喜夫

若 枝 句 会 (浦和)

貼り紙の店主の逝去蟬しぐれ
道なかば動けぬみみず酷暑かな
颯爽と肩で風切るサングラス
サングラス旅する我は異邦人
小鬼百合蕊震はせてりんりと
雄蟬のただ鳴きはつる命かな
蟬鳴くや己が命を知らぬ氣に

小 梅 の 会 (浦和)

雨上がり光る池塘に水すまし
人も蚊も力尽きたる今日の午
雨の木道ニッコウキスゲと歩きゆく
箱釣りや歳月早し鉢狭し
舌先に粗塩舐めて冷酒かな

あ ゆ み の 会 (浦和)

夏料理切子グラスに発泡酒
日盛りや人無き路地を救急車
よく通る風がもてなし夏料理
日盛りや用件端折り帰宅の吾
涼しさを求めはるばる利尻富士
日盛や精気の失せし枝の先

貞代
しょうこう
みどり

美佐子
泰子
泰生
敏江

進
隆文
恵子
隆然
道を

和
啓子
俱子
重子
山遊
藻好

め だ か 句 会 (浦和)

玉葱に引き立てられし緑黄色
玉葱の白瑞瑞し夕厨
絵手紙に玉葱描く便りかな
地下道を出て炎昼のご真ん中
白雨止みしばし晴間も土砂くづれ
炎昼や名医に会ひに坂登る
炎昼のものはや無口な理髪店
取り敢へず間髪入れぬビールかな
炎昼もお洒落優先高校生
七夕の月を待つ間に願ひごと
炎昼に散る水しぶき子らの声
あかつきや波間ただよふ鯛鳥賊
夏真昼ファン付作業服の鳶
玉葱や今年は高騰半分こ
炎昼の演説万雷の拍手

妙子
知子
鷹を
千鶴子
莊志
灯留
六弦
敦子
美津子
和子
月を
鶴城
はるみ
三茅

誤植訂正

八月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。
五七頁下段
正 町中に若葉沸き立ち。大合唱
誤 町中に若葉沸き立つ大合唱
寺内知子

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指 導 者] 網野月を
- [作 品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手
を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なして随時受付
- [送 付 先] 網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

「りんどう忌」のご案内

- 【日時】 2024年9月30日(月曜日) 午後1時受付
【会場】 浦和コミュニティセンター (パルコ10階) 第13集会室
【投句締切】 午後1時30分
【兼題投句】 投句:2句 兼題:「りんどう忌」・「かな女忌」及び「秋の蜂」
【会費】 1,000円(昼食はありません。飲み物は各自ご持参下さい)
【申し込み】 8月号の巻末に添付の申込書に会費を添えて、9月20日までに発行所総務へお申し込み下さい。
※申し込みの無い方の入場は原則として出来ません。
※状況により予定を変更する場合があります。
◎りんどう忌の参加者で、今年(令和6年1月～12月)に米寿(満88歳)又は喜寿(満77歳)を迎えられる方には記念品を贈呈致します。

事業部

水明競詠

(令和六年)

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。

ふるってご投句下さい。

掲載は十一月・十二月合併号になります。

兼題 「新涼」「秋涼し」「涼新た」の傍題に限る

「朝顔」「牽牛花」の傍題に限る

「云」(詠み込み) ※秋の季語で詠む

句数 三題通じて五句

締切 九月二十五日

投句用紙 九月号巻末に添付

令和7年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。
新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和7年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 令和7年水明1月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。
尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

 2024年 **10**月号

特集 はじめの一句〜俳句への道

○俳句を始める、前段階の悩みにこたえる
Q1「言葉」が浮かばない 佐藤郁良/Q
2 詠みたいことが多く、短くできない
加藤かな文/Q3 自分の句が普通で、オリジナルなのかわからない 高田正子/Q
4 名句で勉強しようにも、名句が難しい 岸本尚毅/Q5 句会を勧められるが、人付き合いが苦手 塩見恵介
○俳句を作ってみよう！と刺激を受けた句
鳥居真里子 小林貴子 野中亮介

クラビア 俳句界NOW 鈴木正子

特集「笑い」の力
〜思わず笑ってしまう俳句

○笑いの効能
井上宏(日本笑い学会初代会長)
○思わず笑ってしまう俳句セレクション
○滑稽俳句協会の取組み 八木健

注目の句集
山咲一星『どっこい生きてる』
北澤星子『砂の伽藍』

＊セレクション結社「山繭」福山良子

私の一冊 松尾清隆「松の花」

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。

お求めは…〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

株式会社 文藝の森

「現代俳句カレンダー 2025」 販売のご案内

「現代俳句カレンダー 2025」ご注文の受付を開始します。
今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしております。

◆ **体 裁**：A 4 判の上下二連

◆ **価 格**：1,200 円 / 1 冊（定価の 2 割引）

◆ **注 文**：下記の通りお願いします。

葉書に 3 項目を明記する。

① 注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

② 注文冊数

③ 受取り方法 [発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10 月 21 日(月) お早めにどうぞ!!

◆ **備 考**：① 水明俳句会より下記 10 名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を 大村節代
石山かつ子 大橋廸代 星野和葉 境 延昭
五明 昇 石井喜恵 青木鶴城

② 自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※ 間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。

葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ 不明の点については、[総務部 日高道を]

Tel 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介
総務部長 日高道を

風 声

○現代俳句七月号——「今月の特選句（風を詠む）より」欄
久保純夫氏の秀句五句鑑賞に

飛魚の軌跡見てゐる数学者

菊池ひろこ

飛翔する軌跡は恐怖の痕跡でもある。冷徹な数学者。事への視点はそうありたい。

○現代俳句七月号——「風を詠む」秀句を探る欄

石原玲子氏の感銘八句抄に

飛魚の軌跡見てゐる数学者

菊池ひろこ

○現代俳句七月号——第一回現代俳句「風を詠む」欄

飛魚の軌跡見てゐる数学者

菊池ひろこ

どつしりと万緑に座す貴惣門

大塚茂子

マンガーや女王気分味はへり

小駒さち子

川べりの宇宙遊泳蜜狩

近藤徹平

青き灯に集く夏虫終電車

反町 修

夾竹桃マイナンバー持つ持たぬ

茂木和子

ドーランの女形に見せ場白牡丹

鳥羽和風

白团扇草の庵に墓ふたつ

檜鼻ことは

街中サンバ初夏の神戸を席捲す

田寺玲子

○現代俳句七月号——「新入会員記念作品」欄

袖に触れ揺らぐ大社の赤椿

丸屋詠子

花の昼舞台の景は桜狩

〃

○くぢら（中尾公彦主宰）七月号——「受贈俳誌美術館」欄

かわほりを海へ蹴散らす大落暉

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）——「受贈誌拝見」欄

地に指のとどく体操別れ霜

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）七月号——「受贈誌御札」欄

半ドン（高橋健文主宰）七月号——「受贈誌御札」欄

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）七・八・九月号——「受贈誌」欄

練堀のほどよき高さ寒椿

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）七・八月号——「他誌拝見」欄

銅像の人馬もろとも冴返る

〃

○菜の花（伊藤政美主宰）七月号——「諸家近詠」欄

野に遊びつくして替はる影の向き

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）第七十二号——「受贈俳誌より」欄

艦長の袖の金筋風光る

鬼之介

半ドンは昭和の遺物さくら餅
（日高道を抄出）

水明発展基金御礼

(敬称略)

—令和六年七月三十一日現在—

元田亮一	波多野寿子	森本早苗	越田栄子	日吉亜弥子	綿貫ひさの	石川理恵	嶋田洋子	夏行三日より	染谷風子	梅澤輝翠	日高道を	大村節代	石山かつ子	小林京子	丸山マシミ	田中章嘉	保坂翔太	河野はるみ	石井喜恵	
10	10	10	10	10	10	2	3	1	1	1	3	2	2	1	2	1	1	1	2	1
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
皆川更穂	清水桂子	田中章嘉	宮崎チアキ	曲淵徹雄	笹本啓子	丸山マシミ	星野和葉	本橋稀香	西幅公子	反町修	下川光	田中章嘉	保坂翔太	菅原真理	野田静香	大塚茂子	秋谷風舎	合計	112	
3	1	1	1	2	1	1	2	1	2	2	3	1	1	3	2	2	1	□	□	□
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□

好評連載
好運

小林秀雄の眼と俳句 ほか

俳句の水脈・血脈／蛇笏賞の歴史

※内容は変更になる場合があります。

採録

対談

石寒太×小澤實

隠岐の楸邨

特集

大解剖！

魔法の一音

総論 一音の重要性
論考 季語・名詞・動詞・助詞・助動詞
鑑賞 スゴイ一音の句

巻頭作品50句 宮坂静生

特別作品30句 中村和弘

作品21句 山尾玉藻 ほか新作多数！

俳句

10月号

予告

9月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

後記

今月号は全国大会の特集です。裏表紙には、主宰を中心に受賞された皆様の笑顔の写真です。

今年の全国大会は、昨年と同じ「さいたま共済会館」でした。二度目とあって、水明側も共済会館側も、良い意味で馴れてスムーズだったように思いました。

予報では雨だったお天気も水明(晴れとなりました)。

まず主宰から六賞受賞の方の表彰、新季音同人、新同人、昇欄者の紹介が行なわれました。その後兼題句の入選句の発表があり、時間の許す限り、主宰は丁寧な講評をして下さいました。本号では当日発表出来なかった佳作までの入選句を掲載しました。

以前お配りした全国大会の全投句表は、皆様の投句のままを原則としていますが、本号の入選句は送り仮名等を、主宰が直されたり編集部で直したりしている場合がありますので、ご了承下さい。

今大会と懇親会には、遠路はるばる、関西から大橋旭代・森本早苗氏、若狭から鳥津初花・鳥羽和風・檜鼻ことは、飛永鼓氏の六名がご参加下さいました。

久し振りの再会に、主宰はじめ皆様も大いに旧交を温められた事でしょう。

また大会では、水明の表紙絵(内田恵子氏)とカット(福田千春氏)をお描き下さっている二氏をご紹介しました。水明の表紙絵とカットを長年描いて下さっているも、ご存知ない方が多いので、ご紹介出来て、ほっとしました。

例年通り夏行が七月二十九日、三十日、三十一日の三日間にわたって、行なわれました。皆様あついで、暑いと言いつながら、作句になると真剣に取り組み、良い句が続出でした。恒例によって、高得点の方が当日の記事をお書き下さいました。石井喜恵氏、染谷風子氏、皆川更穂氏ありがとうございました。

コロナはじめ色々流行っているようです。ご自愛下さい。(節代)

今月のはてな？

- 結る(たが)ねる
- 水団(すいとん)
- 帷子(かたばら)
- 蝦蟇(がま)
- 蠅虎(はえとりぐも)
- 踏鞠(たたら)
- 舞妃蓮(まいひれん)
- 梅桐(とべら)
- 木耳(きみみ)
- 石堀小路(いしべこうじ)
- 油頭(スワトウ)

88 86 86 85 62 55 54 53 51 23 16 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和六年九月号
通巻一一二八号
令和六年九月一日発行

発行所

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇一二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央 美 版

季音抄

山本鬼之介

長旅の終着駅の白夜の灯
湯上りの刀自へ揺れそむ七夕竹
白南風やボトルシップの走り出す
尾道の直哉の寓居月涼し
サマーコスメ自惚れ鏡かくし持つ
名塔を視野に納めり新樹光
羅の反り身を写す大鏡
本心を語り始むるサングラス
羅や流るるやうに綾まとふ
額工房の槌音緑ふかきより
一品は貴船の風や夏料理
海霧深し宗谷岬の望郷碑
喜望峰越ゆるを夢見三尺寝
ころ合ひの羹うれし夏料理
玉垣を越す蚊柱の一踊り
産声の待てど聞こえず夏の星
髪切つて茅の輪くぐりのからやかに
風薫る麒麟の顔がぬつと来る

小倉倭子
菊池ひろこ
五明昇
境延昭
椎野美代子
島津初花
森川義子
松宮保人
梅澤佐江
松井由紀子
大場順子
近藤徹平
河野はるみ
横山君夫
曲淵徹雄
野田静香
石川理恵
保坂翔太

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

籐椅子の父の形に包まれたし
 山裾へ裾へ早苗の千枚田
 岸の葦薙ぎ倒しゆく大出水
 桑の実や指に染み入る里の色
 カンナ咲く思ひ出の坂登り切る
 ひつそりと隣家覗くは七変化
 例幣使街道走るはたた神
 たましひの抜けし盛り場灯蛾の嵩
 夏の月閑かに凜と廃駅舎
 夜を生きて玻璃戸を叩く火取虫
 橋桁に木馬一頭出水かな
 沢蟹の小さき足跡追ひつづけ
 鈴蘭に呼ばれたやうで鉢ひとつ
 近づくや葵祭の御所車
 沙羅の花魚鼓の鳴りたる古刹かな
 幸せの真ん中にゐるさくらんぼ
 虫干の本より父のラヴレター
 蠅虎を潰さぬやうに跳んでみる

小林京子
 菅原卓郎
 新 曆文
 阿部幸代
 山岸久美子
 寺町知子
 飯田忠男
 森美枝子
 岡田宣子
 菅原真理
 池田珪子
 篠崎紀子
 清水桂子
 丸屋詠子
 反町 修
 霜多光代
 皆川更穂
 森下山菜

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木林 和京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中木 どり城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 明淵 昇雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石反 井町 喜恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅河 澤野 佐江み
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正石 木田 萬蝶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和六年九月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第九号)

定価 一〇〇〇円